いろは「"人を助ける"って、楽じゃないよ」

一時キリカ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

主人公の１５歳の魔法少女は、ある目的により市外から神浜市へとやって来た。いろはは夢の中で何度も見知らぬ少女に出会う夢の真相を知るために、現地の魔法少女と小さいキュゥべえを探す。

だが・・・この町に潜む魔女達は強く、その使い魔でさえ手に負えない程の強さにいろはは追い込まれる。そこに現れたのは、もう一人の主人公。彼女はいろはの”助けて”という言葉によって、二人は新たな物語を歩む。

『準備は良い？　Ｉｔ，ｓ　Ｈｅｒｏ　ｔｉｍｅ！　（さあ、ヒーロータイムだ！）』

「はい、ヒーロータイムです！」

『「やっぱり休ませて・・・」』

※１話単位で消す筈が、まとめて消えてしまったので再投稿

目次

本編（Season1）
Episode00【Hero Time!／新たなレコード】 1
Episode01【Strange point／何か私が知ってるのと違う】 6
Episode02【Team up／繋がり】 14
Episode03【You Again?／お早い再会】 20
Episode04【Simple／たった1つの出合い】 29
Episode05【We are going to just miss each other!／すれ違いな出合い】 43
Episode06【Would you like some dessert?／甘味に勝てる女子はいない!】 54
Episode07【I am a Caster too!／魔術師の妖精】 60
Episode08【Turning Of Wheel／集いしは、星々の願い】 68
Episode09【I hate everything・何もかもが憎い】?キャラ崩壊強め 80
Episode10【Be The One・重なり合う魂の本質】 86
本編（Season2）

Episode1【I am the Supergirl／私が”最強”の…!!】 97
Episode2【Spiritual sites／縁結び】 105
Episode3【Birds of a Feather／似た者同士】 114

本編（Ｓｅａｓｏｎ１）
Ｅｐｉｓｏｄｅ００【Ｈｅｒｏ Ｔｉｍｅ！／ 新たなレコード】

舞台は新興都市、『神浜市』…

何かに導かれ、魔法少女と魔女がこの町に集う。

〔◿・ポーッ!!〕

ガッ！

「うっ!?… まだっ!!」

バシュンッ!!

今戦っているのは、ピンクのラインが入った白いケープを纏う魔法少女。クロスボウを武器にし、体当たりして来た魔女の使い魔に反撃に出る。

〔ボッ▲€!?〕

〔ポポッ◎☆Σ!!〕ダッ！

「――ッ!?　そんな、こっちからも… !?」

ドッ！

「うううっ！」

ズザーッ!!

――使い魔は一体だけではない。

奴らは群れを成して、人間達に牙を剥く。少女が一撃を入れる度に、使い魔達は確実に隙を突いてくる。少女は使い魔の体当たりを再び受け、小柄な体を吹き飛ばされては地面に叩きつけられる。

連戦によって白いケープはボロボロになり、彼女の状態を分かりやすく表しているだろう。

「はぁ… はぁ… はぁ…」

（（だめ・・・ 1回戻らないと・・・））
〔◇??ポーッ！〕
「あっ・・・」
本来ならここで少女は気を失い、キミ達の知る”物語（マギアレコード）”になる筈だ。
だが・・・ 1つの行動が、展開を変えられるかも知れない。

「たす・・・ けて・・・」
――――――!!
「え？」
『Ｉｔ，ｓ ｈｅｒｏ ｔｉｍｅ!! ―変身―（シフト・チェンジ）!!』
ピカッ！
『”ネロ・クラウディウス”！ 華麗に舞うとしよう!!』
緑色の閃光と共に現れたのは、子供のような風貌のある赤い舞踏服を纏い、炎を帯びた赤い剣を持つ金髪の女性。身長は少女とよりも低くも、その姿は誰もが”美しく、輝かしい”と感じさせる。

〔▪?ポーッ！〕
〔〔⊠▽??ポッポーッ！〕〕

「たぁっ！」
シュッ！
ガッ！
ズバァッ!!
〔ボォ????ッ⁉〕
シュゥゥ・・・
次々と使い魔を斬り倒し、少女達を囲っていた群れは着実に減っている。
しかし、身を潜めて少女に近付く影が・・・
〔ポォッ!!〕ダッ！

ボォウッッッ!!!

『マナーのなっていない客よな』

「あっ・・・ あの・・・・ !!」フラッ・・

『ぬっ!?』

タッタッタッ!

少女は、助けに来てくれた女性に弱々しく手を伸ばす。その声に気付いた金髪の少女は、小走りで少女に近付いて手を取る。

『余が来たからには、貴殿の生還は必然だ。目を閉じよ、次に目覚めた頃には日常が待っておる』

ギュッ!

「あっ・・・・」

ここで少女は気を失い、1つのＩＦ（もしも）が確率された。”２度”のフラグを作り出した少女は、新たな物語へと歩み出すことになる。

「う・・・ うーん・・・ ここは・・ ?」

一人部屋にしては大きく、部屋の半分だけピンク一色の寝室で目を覚める。ここは・・・

「私の部屋・・・ ?」

何処から見ても少女自身の部屋だ。

「もしかして・・・ さっきまでの事は、夢だった・・ のかな?」

『・・・・ 次に目覚めた頃には日常が待っておる』

「ううん、あれは・・・・」

そして私は今日も、”また”神浜市に行くこととなる。
――このモヤモヤした気持ちの答えを求めて
――私を助けてくれた、誰かを知ろうとして

――――――――――――――――――――――――

「・・・ うぅん・・・・ あれ？」
さっきまで自分の寝室だった場所は、有るはずもない大きな青白いステンドグラスが目に映った。
『あらぁ、起きたのね♪』
『おっ？ やっとお目覚めか！』
「アナタ達は・・・・？」
『アタシは”ももこ”。で、こっちが調整屋の』
『”八雲（Ｙａｋｕｍｏ）みたま”って、言うのよ？。お客様として来るのなら、今後ともご贔屓してちょうだいねぇ』
「えっ、あっ、はい・・！”環（Ｔａｍａｋｉ）いろは”です」
燕尾服のような魔法少女服、そして間延びした口調で話すみたまさん。ソファーに座って、メロンソーダのジュース缶を口にするももこさんが私が起きるまで待っていたみたいだった・・・
でも・・・ そこには、私を助けてくれた女性の姿は無い。
「――すみません、私を助けてくれた金髪の女性は・・・」
「金髪？ さっきいろはちゃんを運んで来た人は、黒髪の人だったよ」
「んー。ももこは知らないと思うけどぉ、あの人って色んな姿に変わる魔法が使えるみたいよ？」
「え、レナみたいに変身する魔法が使えんのかよ？」
「それもちょっと違ってぇ・・・」
私を助けてくれた人はどうやら、さっき来たという黒髪の女性で合ってるのかも知れない。今から出ればきっと、お礼くらいは言えそうだと思う。それからは私の行動は早く、ベッドから起き上がって、あの人に会いに行こうと小走りしました。
それに、あの人から・・・

「ベッドを借りさせて貰って、ありがとうございます。ちょっとあの人にお礼だけでも言いに行って来ます!!」
「え、いろはちゃん!?　まだ外に出ちゃ・・・」
「失礼しました！」
　バタンッ！
「今出たら、絶対アイツに捕まるぞ・・・　って、もう聞こえないか」
「大丈夫ぅ、どうせ嫌でも会いに来るわよ?」
「どっちが先に会えるやらか・・・・」
　忠告を聞かずに出て行ったいろはに、ももこは頭を抱える。みたまは特に心配する様子もなく、励みにもならない言葉をももこに送る。
　さて、いろはというと・・・・

『今から心置きなく、あなたを町から追い出せる』
「あの・・・　私、何かしましたか?」

　青い魔法少女の槍が、いろはに突きつけられていた。

Ｅｐｉｓｏｄｅ０１【Ｓｔｒａｎｇｅ　ｐｏｉｎｔ／　何か私が知ってるのと違う】

Ｈｏｗｄｙ！　元気してる？
…　ああ、そう言えば初対面だったね。

前の話で、いろはちゃんを助けた聖女お姉ちゃんだ。
（→赤の他人です）
今別視点で説明するけど、いろはちゃんが魔法少女に喧嘩を売られてる状態だよ。こうなった経緯なんだけど、まずは彼女が起きる前に逃げた”私を追いかけようとした”のが原因。
マギアレコードプレイヤーなら知ってると思うけど、この神浜市の魔女（使い魔も込み）って、馬鹿みたいに強くなってるんだよねー。いろはちゃんが使い魔からリンチされてるのを、コンビニ帰りで助けた訳だけど、実は今回戦う魔法少女もこっそり居たんだよ。
私も既に何度か会ってるけど、あの魔法少女は全く話を聞かない（６連敗）
「待ちなさい」
「すみません、今急いでるんです!!」ダッ！
ビュオッ!!
「!?」
”待ちなさい”と、言ったはずよ？　どうしても通りたいなら、私を倒してから行きなさい」

Ｉ　ｔｏｌｄ　ｙｏｕ　ｓｏ（ねっ、言ったでしょ）？
弁慶やらボス戦とか、ポケモンのトレーナー並に話を聞かないんだ。こんな洗礼（物理）が無ければ、安心してフレンチフライ食べ歩けるんだけどねー（泣）

いろはちゃんの首元スレスレに、水の槍を突きつける状態。アレに当たると、水圧か何かかシュパッと切れますよ？　今まで体験したのは、私と魔女くらいなもよう（^ ―^）

「どうして・・・？」

「あなた自身がよく分かってるはずよ？　”使い魔ごときに無様にやられて、アイツに助けられたじゃない”」

「・・・!!　あの人のことを知ってるんですか!?」

「ええ、知ってるわよ。”私の行動に一々水を差してきて、良い子ぶってる子供”よ」

水属性だけに？

――Ｓｏｒｒｙ，冗談だよ。

何度も邪魔をすれば、ここまでヘイトが溜まりますよね。しかも会うたびに、徐々に急所を狙って槍で突こうとするんですよ？

私は！　ヒーロー活動で！６回で！殺されそうなんだよ!?（）

「そこまで覚えてるのなら、話が早いわ。邪魔者が居たから遅くなったけど・・・・・」

――今なら心置きなく、あなたを町から追い出せる。

バッ!!

Ｈｅｙ!?　それは流石にマズいって!!

――――――――――――――――――――――――

――私は同じ魔法少女に殺されそうになった。

この時に私が思い浮かんだのは、父さんとお母さん・・・・　それと夢で何度か見ただろう、知らない女の子。変身して攻撃を防ぐなんて”無理”だと、何となく分かってた。

ううん、《１つの例外を除いて》

『Ｄｏ　ｙｏｕ　ｍｉｓｓ　ｍｅ？』

ピカッ！

ガッ!!

「やっと来たわね・・・ !!」
『―変身―（シフト・チェンジ）・謎のヒロインＸＸ（ダブルエックス）
――ヒーロー活動は、常に勤務時間ですよ？』
「そう、労働基準法なんて機能し無さそうね。そろそろ休みたくなるでしょ？」
『情をかけてるつもりでしたら、わざわざ炙り出す必要も無し。あとアナタの通り魔紛いな行動を即刻やめてくれれば、少しの八つ当たりで手を打ちますが・・・ どうでしょう？』
「冗談は勝ってから言いなさい」
キィンッ！
露出の目立つインナーと白いアーマーを纏う金髪の女性は、白い槍で水を纏った槍を押し返し、その勢いで青い魔法少女は飛ばされるが・・・ 宙回転して離れた位置に着地する。
それを確認すると、彼女は振り向かずにいろはへと話しかける。
『夕方振りですね。予想よりも早く目覚めるとは、もう少し待っていた方がトラブルは避けれて、休日出勤なんてせずに・・・ いえ、ナンデモアリマセンヨ？』
「夕方・・・ 本当にあの時の・・・ !?」
『姿形から口調まで合致せず疑うのも気持ちは分かりますが、キミが会ったのは紛れもなく私ですよ。何なら、調整屋に聞いてもよろしいですよ』
「・・・」スチャ・・・
青い魔法少女は静かに構える。
矛先はいろはだけに留まらず、助けに来た彼女にも向けられていた。そもそも、いろはの方が”ついで”としか見ていないのかも知れない。
『色々と聞きたいことがあると思いますが、まずはこの状況を切り抜けてからにしましょう。良いですね？』
「は、はい！」
『さて・・・ 待たせてすみませんね、” やちよちゃん”』
「・・・・・」

――――”七海（Ｎａｎａｍｉ）やちよ”――――

神浜市で７年間もの魔女と戦い続け、短命な魔法少女でありながらも、存命しているベテランの魔法少女だ。

「ッ!!」ダッ!!

『Ｉｔ’ｓ ｈｅｒｏ ｔｉｍｅ（さあ、ヒーロータイムだ）!!』

キィン！

再び槍同士がぶつかり合い、鈍い金属音が鳴る。それは一度ならず、何度も、何度でも。一方は”無力化する”為に、もう一方は”倒す”為に・・・一向に終わらないぶつかり合いは、もう一人の魔法少女によって横槍を入れることとなる。

バシュンッ！

ゴポッ！

（（水の魔法を・・・盾に・・・!!））

「所詮は使い魔程度にやられた魔法少女、この程度で防ぐのに魔力も必要なかったわね」

「っ・・・！」

「あら、まだやる気？　でも、引き際を間違わない方が良いわよ」

カチャッ！

ヒュンッ!!

「・・・!!」ダッ！

槍が新たに作り出され、宙に浮かぶそれは刃をいろはに向き、そして射出されるタイミングで彼女はその場から離れる。この行動によって、彼女に当たることなく壁へと突き刺さる。

（（あの人と戦ってるのに、槍を飛ばして攻撃してくるなんて・・・!?））

「まだよ、これで終わりじゃない」

カチャッ！　カチャッ！

カチャッ！　カチャッ！

カチャッ！　カチャッ！

「数が・・・まさか!?」

「行きなさい」

七海やちよの合図に合わせて、槍が一斉に射出される。いろはも同じように、クロスボウをマシンガンが如く矢の連射は可能だ。だからといって、槍の雨を撃ち落とせるだけの威力が無いのを理解している。いろははそのまま成すすべもなく逃げ続け、自身の生存を優先した。

「そのまま逃げ続けなさい、少しでも速度を落とせば・・・ 分かるでしょ？」

（このまま障害物を利用して、死角に入れば・・・ !!）

『・・・ !! シールドビット展開、行ってください!!』

「はぁ・・・ はぁ・・・ !!」タッタッタ！

あと少しで振り切れる。この時の私は、後ろから襲いかかってくる槍から逃げるのに精一杯でした。だからこそ、前と後ろにしか注意を向けれなかったんだと思います。

ヒュンッ！

「えっ・・？」

ガキンッ！

ガキンッ!!

獲物を待っていたかのように、上から降り注ぐ槍の数々。それらから私を守ったのは、あの人と同じ”白い装甲”でした。

―――――――――――――――――――――

『”Don’t even think of cheating on me.”（他に浮気しようだなんて、考えないでください）』

「・・・ 私のセリフよ」

『何を言ったか聞こえませんが・・・ あの子に攻撃を通す程、鈍ってはいませんよ。それとも、あの子に何か恨みでも？』

「・・・”無い”とも言えるし、”有る”とも言えるわ」

私の知る限りではあり得ない。そもそも、年下に好意的ですし。いろはちゃんを町から追い出そうと襲いかかるのも、少しかどうかはと

もあれ〝過保護〟から来るもの。
　それがどうして……
　――こんな必要以上にいたぶるような事を

「分からないかしら？」
『分かりませんよ、やちよちゃんがそれをするだけの理由なんて……』
「……」
　ドスッ！
『うっ!?』
　水の棘が、彼女の装甲を貫く。右肩、腹部、左太股にそれぞれ十数センチの穴を空け、そこから激痛と共に血が流れ出す。
（装甲ごと貫いた……仮にも宝具クラスの防御力、それを突破するだけの実力をいつの間に……？）
「あなたは本当に優しいのね、あの子だけじゃなく私にまで心配するなんて……」
『……』
「もう少し早く会えれば、私は……」
　何やら重要なターニングポイントを聞いてるが、このままだと集中力が切れて、いろはちゃんの所に行ったシールドビットが消失してしまう。しかもハイライトオフの状態で、何か私が出血した部位に触れて手を血塗れにしてる。流石にこれ以上マズい状況は嫌なので……
　少しくらい、〝宝具展開〟しても良いよね？
『控えめに言って本気を出します』
　そして神浜市のひとけのない場所で、白い閃光と大爆発が発生した。
　――――――――――――――――――
――――――――――――――
「え、なにっ!?」

突然目の前が真っ白になって、大きな音が響いた。収まると、飛んで来た槍と私を守ってくれたあの人の装甲が消えて無くなっていた。
でも、音は止んでなかった。
何だろう、まるで近付いて来るような・・・・
『ずらかりますよ!!』
ガバッ！
「ぐぇっ!?」
『間に合ってください・・・ !! 粒子テレポート、起動!!』
ズズズ・・・ シュンッ！

ガッ！
「あうっ!? ・・・・ 一体何が・・・」
気付けば、私の部屋にあの人と居ました。怒涛の展開に、状況を理解出来なかったんですよね。でも・・・ それを起こした本人を見ると、そんな些細なことに構ってられませんでした。
『うぅぅ・・・・・』
((酷いケガ・・・ こんなに血が出てるなんて・・ !?))
「――――しっかりしてください!!」
『・・・ 良かった、アナタを助けれましたか・・・・』
「私のことなんて気にしないでください！ それよりも、自分の心配を・・ !!」
『大丈夫ですよ・・・ こんな傷、寝ればすぐに・・・』
そしてあの人はここで意識を失い、私もここから記憶があやふやなんですよね。おそらくは、あの人に何度も治癒の魔法をかけたんだと思います。
両親が海外へ出張して不在なことを、今日ほど感謝することは無かったでしょうね。

そして・・・

――――――――――――――――――――――――ーーー

いやー・・・まさかあの棘攻撃って、内部からも襲って来るとは思わなかったよ。攻撃方法が、魔法少女の発想じゃねぇ!!
おかげで見た目以上に重傷になったし、いろはちゃんの部屋で気を失いました。ダイナミックお邪魔しますしたのに、ベッドまで借りてしまうなんて、この少女は優しい天使ですね♪

――だからって、普通〝添い寝〟します?
『うーん、少女特有のぷにぷに肌。心地良いけど、艦これ次元なら同性でも憲兵に捕まっちゃうよね』
その前に、嫁に見られたら死ぬ。魔女化して、ギュッと大きな手で圧死されちゃう。故に、逃げるしかないったらない。
でも、だいしゅきホールドで逃げられない!!(悲報)
「うぅ・・・ん・・・・誰・・?」
『・・・・ドーモ、いろは=サン。一時　拓末(Ｈｉｔｏｔｏｋｉ　Ｈｉｒｏｍｉ)デス』
「・・・・きゃぁぁあああああっっっ!!?」
パチィンッ!!
こうして私の自己紹介は、赤面平手打ちで返された。
――本当に〝人助け〟って、楽じゃないよ

Ｅｐｉｓｏｄｅ０２【Ｔｅａｍ　ｕｐ　／　繋がり】

「あの・・・ すみません」
「いや、良いよ。これくらいなら、別にそこまで痛くないし」
Ｈｏｗｄｙ！　元気してる？
一時　拓未ちゃんだよ（平手打ちで困惑する人の顔）

気絶した後の事なんだけど、どうやらいろはちゃんは自分の魔力を空にするくらい回復魔法をかけてたみたい。そんなことしなくても、自然治癒で一晩経てば治るのは・・・ 言わないでおこう。
そうなると、神浜市外に居るいろはちゃんは魔女化不可避ですが・・・・ 大雑把に説明をすると私って、魔法少女の穢れを吸って魔力回復するんだよね。
私が”魔女じゃね？”って思うだろうけど、それも違うんだよ。皆の知らない間にいろはちゃんに説明したけど、私は”別世界出身”なの。

「それにしても・・・ スゴイですね、魔法少女の穢れを吸い取るなんて」
『私達の世界の魔力は、いろはちゃん達の穢れと性質が近いんだ。だから朝起きたら、密着してたいろはちゃんを通して穢れが私の魔力へと変換されたんだよ』
「みっ・・・”密着”て・・・ ／／」
『事実でしょ？』
再び顔が赤くなるいろはちゃん、私の胸を気持ち良さそうに埋もれてたから是非もないネ。性別関係なく、オパーイ！が嫌いな人は存在しない。同じく・・・ 思い出して赤面するいろはちゃんもまた、アンチじゃない限り嫌いな人は居ないだろう。（異論がある奴は、ストラーダ・フトゥーロ）

「拓未・・・ さんは、いつからこの世界に・・・ ？」
『３週間くらい前』

「最近なんですね。　別世界から来ちゃうスゴイ人だから、もしかして・・・ 秘密の拠点とかあるんじゃないですか!!」
『・・・・』
「えっと・・・ 拓未さん、どうしてそんな表情を・・・？」
キラキラと目を輝かせるいろはちゃんに、私は気不味そうな表情をせずに居られなかった。察した彼女は、恐る恐る聞いてきた。
『”魔法少女の組織”が総力をあげて、私の拠点を攻めて来た。それに加えて、仲間とも逸れた（真顔）』
「え”っ」
どんな組織が攻めて来たと思う？
プレアデス星団？
？あっちはあっちで、仲間割れで忙しい時期だと思う。
ピュエラ・マ（ｒｙ
？どこぞの遊戯王アニメみたいに、どうせ全く相互リンクしてない。おい、団結しろよ（）

それじゃあ、残るは・・・
『全部”マギウス”って奴の仕業なんだ』
「えっと・・・”マギウス”ですか？」
うん、やっぱりキチスマイル無しだと草加の真似にならないか。
（そこじゃない）

第二章まで進んだ皆さんはともかく、まだまだビギナーなモキュやネタバレ嫌いな人も居るかもなので、軽く紹介します。
？マギウスは、”マギウスの翼”という組織のトップになります。基本的な目的は、”魔法少女システムから開放されること”です。つまりどういうことかと言うと、”魔女化から抗う”為の組織です。
一見善意のある目的ですが、この組織は過激派になります。一応穏便に解決しようとはしてるものの、犠牲者は確実に出ます。てか、トップであるマギウスがヤベー奴しか居ません（確信）。
今回襲撃された理由も、私の特性や出自が関係してると直感が囁い

ています（直感·E）　早速いろはちゃんにも説明しよう、イクゾー!!
『私の能力を、マギウスが独占か邪魔だから消そうと考えてるんだと思う。だからマギウスの手足であるマギウスの翼、つまりは魔法少女達が襲撃して来たんだ』
「そんな…　酷いですよ」
『ヒーローでも、誰かの都合で悪者扱いされることもあるんだ。それは別に、この世界に限った話じゃないよ』
「……」
　流石の主人公も黙ってしまう。こういったことは初めてじゃない、ＳＡＯのユウキちゃんも同じように黙り込んで、彼女の場合だと〃一時　拓未が色んな世界でそんな扱いされている〃のを想像していた。それはユウキにとって、最もツラい記憶と重ねていた。

　まぁ、自分で言っておいて何だけど…
　私は誰かがが思い苦しむ為に、戦っている訳じゃないんだよ。

――――――――――――――――――――――

――――――――――――――――

――私は拓未さんの話を聞いて、心が苦しくなった。
自分がどれだけボロボロに傷付いても、拓未さんが安心させるようぎこちない笑顔をして気を失ったのは記憶に新しい。あの人は今まで誰かを助け、どのように裏切られ、それでも誰かを助け続けていたのか…

『大丈夫ですよ…　こんな傷、寝ればすぐに…』
　あまりにも、傷付き慣れてしまっている。今までなら拓未さんの仲間が支えていたけど、今は〃支える人は居ない〃。それを知っているのは、多分…〃私だけ〃だと思う。

「拓未さん、今はどこで寝泊まりしているんですか？」
『カプセルホテル……』
「……」ジトー
『隠蔽魔法かけて野宿してます、だからそんな目でミナイデ』
「… 分かりました。そんな拓未さんに提案があります、しばらく私の家で住みませんか？」
『――Ｗｈａｔ？ それは流石にわｒ』
「タダでとは言いません、私も神浜市でやることがあるんです。だから、その手伝って貰う間は住んで良いです」
そう聞くと、拓未さんはわざとのようで、本気で思い悩みました。私はそんな様子を見て、少しほっとしました。

『ところで、Ｖｅｔｏ（拒否権）は？』
「ある訳ないじゃないですか、私は〝使い魔すら倒せない魔法少女〟ですよ？だからこんなチャンス、絶対に見逃しません♪」
別に私は使い魔を倒したくて、拓未さんを引き留めてるんじゃない。でも…

――一緒なら、先に行ける気がする！
『なら、Ｔｅａｍ ｕｐ（手を組もう）だ。神浜市で人助けしながら、いろはちゃんの目的もこなす。良い？』
「――はい！」

こうして私達は、信頼出来るパートナーまでの関係に一歩を踏み出しました。
待っててね、夢の中の誰か…
――もうすぐ、また会えるから!!

《ステキ》
《コンドハワタシノタメニ、テニイレタクナル”希望（ホシ）”ヲミツケルナンテ》
《トッテモ・・・ ウレシイワ》
「違うっ!!」

ガシャンッ!!
　暗い部屋の中で白い仮面を付けた自分の姿が、3枚の鏡の中で、それぞれ意味有りげに言う。写身（ドッペル）に対して少女は、机の上にあった化粧品の数々を”否定”という感情のまま払いのける。

「違う・・・・ ちがっ」

《ナニガチガウノ?》

キミが何で誰にも知られずに、　　ひっそりと死のうとしたのかは知らない。

「あぁぁ・・・ ああ・・ っ」

――――――――――――――――――――――――――――――

助けを呼んでみなよ、”ヒーロー”は必ず助けに来るからさ！（?⊠・）—☆

――――――――――――――――――――――――――――

「助けて…‥」

少女は、人知れず涙を流す。

——最後に残った、星（Ｈｏｐｅ）に”助け”を求めて…

Ｅｐｉｓｏｄｅ０３【Ｙｏｕ　Ａｇａｉｎ？　／　お早い再会】

『お願いだから、ピッタリの来てよ？』

〔・・・!!〕

「拓未さん、魔女に気付かれました!!」

『Ｉｔ’ｓ　ｈｅｒｏ　ｔｉｍｅ（さあ、ヒーロータイムだ）!!』

【―変身―（シフト・チェンジ）】

ピカッ！

黒髪の女性――拓未は、変身しようと念じて黄緑の閃光に包まれる。閃光が弱まり、次第に変化した姿が顕になった。

オレンジ色の髪とサイドはゆるい縦ロールに、バックは三つ編みにした、常にジト目のような半目の女性。

全身に張り巡らされたベルトと片手足首の錠、南京錠に鎖付きの首輪と、青紫色のボンテージに近い霊装”神威霊装・八番（エロヒム・ツァバオト）”を纏う。

『八舞　夕弦（Ｙａｍａｉ　Ｙｕｚｕｒｕ）！　妥協・・・思っていたのとは違いますが、やれなくは無いですね』

Ｈｏｗｄｙ、元気ですか？

拓未です（真顔ダブルピース）

解説。私達は現在”神浜市”に来ており、ココに住む魔法少女の情報提供を頼りに”小さいキュゥべえ”の探索をしております。その道中で救助活動も行い、助けを求める声に駆け付け、現在に至ります。（状況）確認。救助活動中に今回初めて夕弦を使う事になりますが、幸いにも実物とは縁があったので、能力の出力不足は無さそうです。戦闘には向きませんが、それは”一時　拓未”としての経験を活かしま

す。

――――――――――――

「ななな っ……／／／」

（（ひ…　拓未しゃんっ!?／／／））

　私は救出した水色の魔法少女と同じく、顔が赤くなっていたんだと思います…

　余りにもその…

同性でも、刺激的過ぎますぅ!!

　あのキョトンとした表情を見るに、思っていたのとは違う人物に変身したんだと思います。でも、直ぐに気を直して鎧の魔女に挑みます。

「気を付けて、ソイツは…‼」

――――――――――――

　瞬間移動のよう神出鬼没に現れる魔女は、魔女自身の鋭利な腕を振るい、次々と散らばっているアンティークの品々を粉砕する。この魔女が狙っているのはそんなモノではなく、自由自在に飛行する拓未を当てれずにいた。

（（観測…　魔女の命中精度の低下、あと少し））

「～～!!」

　歪んではいるが、曲がりなりにも魔女にだって心はある。それでも”本能”に強く引っ張られ、生前の魔法少女での癖が強くなる傾向にある。

　この鎧の魔女場合、騎士道に準じたバトルスタイルが見られ、いろは達を狙ったり…　罠をかけるようなことはして来ない。逆に戦意がありながらも、敵前逃亡する相手には殺意が湧くくらいに嫌いなようだ。

　拓未はそのような考察を、原作である”魔法少女まどか☆マギカ”

の世界で既に試していた。結果として、”
この世界でも、ある程度は期待できる”と判断した。
『勝負。まずはその腕から、”縛める者（エル・ナハシュ）”』
ジャラッ！
［！］
青い宝石を先端に付いた、ペンデュラムのような鎖を放つ。それは蛇のようにうねらせ、魔女の鋭利な腕をめいいっぱいに絡め取る。
［：!!］ググ
『観察。力勝負ですか：：　質問。引っ張り合いには、些か”短い”とは思いませんか？』
ジャラジャラジャラッッ!!
説明。私の魔力を糧に、縛める者（エル・ナハシュ）を更に伸ばします。魔女は黙々と引き込もうとしますが、最後に私は引き戻すこともなく”手放す”事にしました。
ジャラッ：：ギチィッ！
［：!?］ギギギ
『決着。私のペースに呑まれたのが、アナタの敗因です』グッ！
「はあっ!?　何で自分の武器を手放すのよ、あのバカはっ!!」
「待ってください、アレは：：」
ジャラッ!!
拓未さんが手放した鎖は、引っ張っていた魔女に襲いかかりました。魔女自身が引き伸ばした分はとても長く、手足を厳重に縛られ、文字通り指一本も動けれずにいました。
鎖の先端だけが浮き、魔女の目の中心で留まりました。もし魔女の

目線で見ていたのなら、”奥で拳を突き出す天使が、宝石を楔に自身の目に打ち付けられる光景”だっただろう・・・・

「え・・・？」

（凄い・・・・一人で魔女を倒しちゃった）

ほんの一瞬の出来事が、結界と共に魔女は崩れ落ちました。最後に振り返って手を振ったあの人の姿が、きっと私の目標なんだな・・と、輝いて見えました。

最初に会った魔法少女は、神浜市の誰だと思う？

――――万丈だ（大嘘）。

冗談はパンドラボックスに置いといて、本当は胸元がパンパンな”水波（Ｍｉｎａｍｉ）レナ”ちゃんでした。出るのが早過ぎるんだよォッ!?

そんなレナちゃんは、ソワソワしながらチラチラと私を見て来ます。腕を組んで、自分の胸をバインドしている・・・これは”私の方が乙杯大きいわ!!”と、ルナドーパントのように対抗心を燃やしてるんでしょうか？

ヒーローなので、ここは頭を撫でて余裕を見せ付けましょう。お婆ちゃんは言っていた・・・”胸は大きさで決まる程度の価値ではない”と（言ってない）。

「さっ、触んな!!　通報するわよ!?」

『やめておけカカシ、その護身術は私によく効く』

「誰がカカシよっ!!」ピッ！ピッ！

『私は誓って、人殺しはしてません！（極道感）』

「拓未さん!?」

Ｉ　ｈａｖｅ　ｎｏ　ｃｈｏｉｃｅ（仕方ないじゃん）、ヒーローで

も警察に追われる話は珍しくないもん。何なら、ヤンデレストーカーだって追ってくる。私の場合なら、嫁四天王（1枠空席）の一人がこの世界へ一緒に来ちゃったし‥‥

　考えるの、やーめた!!（現実逃避）

「あの‥‥レナちゃん、聞きたい事があるんだけど。良いかな？」
「‥‥良いわよ、一応レナは助けて貰った身だしぃ？　ソイツならともかく、アンタなら聞いてやってもいいわ」
『それなら好きｎ』
「拓未さん、真面目な話なので黙っててください」
『Ｏｈ‥‥』
　はい、ハジケリストから引退しますね。（反省）
　それと、那珂ちゃんのファンも辞めますね（とばっちり）

―――――――――――

――――――――
「てぇぇとくぅぅうう、なんでぇぇえええぇっ!!??」
「うるせぇ!!　駆逐艦（ガキ）共が目ェ覚めちまうじゃねぇか!?」
「天龍ちゃん、どっちもうるさいと思うわぁ」

―――――――――――

――――――――
　ん、何か別世界で呼ばれた気がする。（ＮＴ感）
　戸締まりしとこ‥‥（無慈悲）

―――――――――――
「小さいキュウべぇ？　あんなの探して、どうすんのよ」
「そ、それは‥‥」

「まあ、いいわ。小さいキュゥべえなら、〝砂場の魔女の結界〟よ」
「砂場の・・・？」
それは私にとって、因縁のある魔女の結界だった。ここで圧倒的な実力差を知り、そして・・・拓未と出会うキッカケになった場所。
そして、もし事実だった場合。小さいキュゥべえは、あれから全く魔女の結界から脱出しないのが気になる。
（〝何か〟を待ってるのかな・・・？）
「質問には答えたし、もういいでしょ？　私にも、これからやること有るんだから」
「あっ、うん」
「あとそれから・・・・」
水色の魔法少女は、拓未さんに向けてビシッと指をさす。一体何を・・・・？

―――――――――――――――――――――

「次は絶対に負けないんだから!!」
『Ｗｈａｔ　ｄｉｄ　ｙｏｕ　ｓａｙ？（何て言ったの？）』
「英語で誤魔化すなー!!」
いや、すまない。マジでＩ　ｄｏｎ，ｔ　ｋｎｏｗ．
どうやら何処かでエンカウントしたみたいですけど、本当に身に覚えない・・・　そもそもこんな2個の小玉スイカを抱えてる娘なら、印象に残りますわよ!!（言語バグ）
「――――本当に覚えていないみたいね。あれだけ煽った癖に!!」
「・・・」ジー
「いやいや、知らないからね!?　これ以上の濡衣は、Ａｓｋ　ｏｔｈｅｒ　ｐｅｏｐｌｅ!!（他に当たってくれ!!）」
【―変身―（シフト・チェンジ）】
ピカッ！

ピンクラインの入った黒いタイトドレスに、バイザーで視界を封じた妖艶な美女へと姿を変える。色々とデカくなりましたが、この状況から逃げられるのなら些細なこと。
『”　メドゥーサ　”！　いろは、行きますよ！』
「え、拓m」
ガバッ！
ダッ!!

私はいろはを抱え、その場から急いで去りました。先程から彼女の視線が痛いですが、ここは魔女の結界までの辛抱ですね…

――――――――――――――――――――――――――――

「それで…　さっきのはどういうことですか？」
『本当に心当たりがありません。そもそも煽りなんて、魔女相手やゲームの時ぐらいしか……』
「魔女ならともかく、ゲーム…　？」
『私の世界にあったゲームがありまして、相手にシャゲダンするのが習慣なんですよ！』

シャゲダン…？というのは分かりませんが、おそらくゲームセンターで因縁ができちゃったんだろう…
「――結構です、もう無実は証明出来たので」
『――!!　やった♪』
…　拓未さんって、結構”子供っぽい”ですね。結局大した問題ではありませんし、次に会った時には謝ればいいですし。
(…　今は小さいキュウべえに集中しよう)
『いろは、もうそろそろ砂場の魔女の結界です。連戦ですが、私のことはお気になさらずキュウべえの捜索を』
「はい、拓未さんも無理をしないでください」
『♪』

私の心配する言葉に、拓未さんは”笑顔（目隠ししてるけど）”で応える。あと少しもすれば、あの夢の手がかりを・・・

――――――――――――――――――――

『これは・・・ 結界が消滅しかけている？』
「え、まだ小さいキュゥべえが居るかもしれないのに・・・ !?」
この辺の魔法少女でも、今の砂場の魔女は手こずると考えていましたが・・・ まさか倒せるだけの実力を持つ魔法少女が、主人公よりも早く潰していたとは。
私が介入した時点で、ある程度の物語の変化は当然起こります。しかし、これは・・・
『いえ、その心配はないですよ』

ズズズ・・・　キュップイ！
「――――小さいキュゥべえ!!」
・キュ～～～ッ・ダッ!!
!!

消滅しかけていた結界から現れた小さいキュゥべえは、必死に何かから逃げようと後先考えずに走り去る。呆気に取られたいろはは、大きく距離が離れた時点でやっと我に返る。
「あっ、待って!!」
ヒュンッ！
『!!』
ガバッ！
「まさか、二度mぐえっ!?」
私は飛んでくる”何か”がいろはへと直撃する前に、彼女を片腕で乱暴に抱え、とっさに避けました。あの”彼女”が殺気を向けたと同時に、容赦なく攻撃するとは・・・

――――こんな笑えない冗談、聞いてませんよ。

―――――――――――――――――――――――

――――――――――――――

ズズズ……

『……どうして、こうも運命が狂うのでしょうね』

「一体何があったのですか……」

私は結界から現れた人物に、口に両手を添えて驚愕したんだと思います。拓未さんに至っては、苦虫を噛み潰したような表情をしていました。

『「やちよ（さん）」』

ユラァ…

「見つけた……」

ザッ！

【オホしサマぁ、ミイつケた】

やちよさんは不気味な真っ白い仮面をつけ、口が裂けるくらいに笑っていました……

Ｅｐｉｓｏｄｅ０４【Ｓｉｍｐｌｅ　／　たった１つの出合い】

「オホしサマぁ、ミイつケた」
『Ｉ（人）ｔｈｉｎｋ（違）ｙｏｕ（い）ｍｉｓｔｏｏｋ（だ）（と）（思）ｍｅ（い）ｔｏ（ま）ｏｔｈｅｒ（す）ｐｅｒｓ（よ？）』
「冗談言ってる場合ですか!?　早く止めないと・・・!!」

Ｙｅａｈ・・・　Ｉ　ｋｎｏｗ.（ええ、分かってますよ）
ですが止めようにも、あそこまで強くなってると骨が折れます。いろはを守りながらだと、尚更・・・

ジャラッ！

『手加減は期待しないでください』

カチャッ！
「ソんナの、いラナいワ！」ダッ！

ガッ!!
キンッ!!
「アハははハハハハッ♪」スッ！
キィンッ!!
ギギリリリッ・・・・
『キャラ崩壊してませんか?　あとで恥ずかしい思い出になる前に、早く元に戻ることをオススメしますよ』
「イやヨ、コンなニ楽シィいのにッ!!」
ギャリッ！
『楽しむのなら、少しは相手にも共有させるよう努力していただきたいです・・・　ねっ!!』

ジャララララッ！

「へぇ・・・」

さっきから鎖で槍を絡めては、また新しい槍で振られるのを絡めて止めるの繰り返し。こんなことを繰り返しても、”どちらかが壊れるまで続く”チキンレースにしかならない。

――これは”時間”と”可能性”との勝負。

”いろはを狙いだし、防戦一方になる可能性”

”私の魔力が底をつき、いろはと死ぬ可能性”

”やちよの異常な強化が、身を滅ぼす可能性”

”やちよが、もう一方（ドッペル）に呑み込まれる可能性”

数々の最悪のＰｏｓｓｉｂｉｌｉｔｙ（可能性）が、数多の世界での経験から思考を通る。一番の”最善策”は・・・

――ヒーロー１人の力では、まだ足りない

私はメデューサには本来ない、緑色の魔石を嵌め込んだネックレスと魔力のパスを繋げる。今更説明するのもなんだけど、”――変身――（シフト・チェンジ）”で変身すると、色々と制約がある。

――

・――変身――（シフト・チェンジ）以外の魔法や魔術が使えなくなる。

⇨代わりに魔力があれば、変身先の使用した能力，今まで使用したアイテムなどが使えるようになる。

・変身先に変身する場合、その対象をどれだけ知っているかで能力や武器を発揮できる。（知らない部分が多いほど、能力の制限や出力不足に陥る）

・よくある話だけど・・・　戦隊や仮面ライダーみたいに、魔力切れや大ダメージで強制変身解除される。

また・・・　その時に変身先もダメージ量によって、アーキタイプの修復が終わるまで使用できない。（例をあげれば前回のヒロインＸＸは、今のところ変身できない）

・変身先が多いこともあって、自分が望んだヒーローに変身できない場合あり。そして自身の呪いから、変身先が男性なら全て”女性”へと変化して、能力も1ランクダウンする。

？今の私は後遺症により、どれに変身しても更に1ランク能力が下がってしまう状態だ。これぱかりは、自身の自然治癒力に頼るしかない。

――――――――――――――――――――――――

――――

さて・・・・

”リハビリ”を理由に、逃げてばかりは居られないね。

『―変身―（クイック・チェンジ）：閃刀姫―レイ！』

【―変身―（シフト・チェンジ）】

ピカッ！

魔石に触れながら、黄緑の閃光を発して変身する。その姿はＳＦのような白いプロテクター装甲の付いた黒いラバースーツを纏い、赤いラインが刻まれた刀剣型デバイスを持つ白味がかった金髪少女へと姿が変わる。

『行くわよ！』

ダッ！

キインッ!!

拓未が刀を振るい、それをやちよは槍を片手で持って防ぎ、互いの武器が押し付けられて発する金属音が耳障りな程に鳴る。仮面の被ったやちよは、ギギギっときごちなく首を傾げる。

「―――ヨわイ。ドうシテ、弱クナってルの？」

『これだから脳筋は・・・・攻撃力ばっか見てると、痛い目に遭うわよ

！』
【閃刀機　――シャークキャノン】
　ジジジ・・・　スチャッ！
「――‼」
『ブッ飛べ』
　片手に一風変わった巨大な重火器が投影され、やちよに向けると、零距離でのレーザーが放たれた。
「・・・　ア・・　あハハハはッっ‼」
『はぁ・・・・　そうよね、終わらないわよね』
「他ハなイの？　モットミセテ‼」
　ダッ！

『・・・　エンゲージ、”Ｘ―００２（ダブルゼロ・ツー）　シズク”‼』
《承認》
　ガシャッ！
【閃刀起動　――エンゲージ】
　再び襲いかかるやちよに、拓未は刀を構えてパスコードを唱える。それに反応し刀は粒子と化して彼女を纏い、青い重装甲が次々と投影されパワードスーツのようになる。（エンゲージは本来、普通の戦闘服になるだけらしいが・・・・　何故かパワードスーツを纏うにも使えるようで、使いやすいから気にしない）
　変身先であるこのキャラクターは、カードゲームで有名な遊戯王から来ている。このテーマはレイやロゼを起点に、専用魔法やリンクモンスターへと展開するのが”閃刀姫”だ。ある意味で、魔法少女と似た存在と言えるかもしれない。（ニチアサ的な意味で）

『どっからでも来なさい！』
「・・・　！」タッ！
　やちよの槍は、的確に拓未の心臓に目掛けて突き出す。拓未はパワードスーツがあるとはいえ、カードゲームでも攻撃力が高い訳でもなく、原作以上に強化されているやちよ相手では装甲として役に立つ

かも怪しい。
ならば・・・・
『閃刀術式展開!!』
【閃刀術式　――ジャミングウェーブ】
青い結界が展開され、その結界を無理矢理槍を力任せに差し込むが・・・・ 強力な電磁波を発してやちよを押し返す。いくら固有魔法で強化された彼女でも、壊すだけの力はまだ無いようだ。
『どう？　そろそろ諦めて、元のやちよを返してくれないかしら!!』
「――マダよ。ツギは、わタシがミセルバんだから」
シュゥゥ・・・
「・・・・・・」
そう言ってやちよは槍を立て、穢れを散らしながら集中する。すると、霧状の穢れは固まり・・・・ 人の形へと変わる。それは穢れの黒一色でありながらも、鉄パイプを持った魔法少女へと変わったのだ。
（あれは・・・”雪野　かなえ”!? 冗談じゃないわ、あの固有能力にそんな使い方が出来るなんて聞いてないわよ!!）
『間に合って!! ”閃刀機　――ウィンドウアン・・』
「はアッ!!」
ブンッ！
閃刀姫シズクの能力で、あのかなえの幻影を無力化しようと閃刀機を緊急展開するも、その前に槍が結界に突き刺さる。それは先程と違い、まるで硝子をバットで叩き割るように崩れてしまう。

そう――――
”雪野　かなえ”という魔法少女の固有魔法は、”装甲無視”という内部からダメージを与える魔法だ。積み上げた積み木の城という結界を、無理矢理パーツ一本を押し込んで、バランスを整えられないよう崩していると言ってもいい。
『・・・ カー!!』
シュルルッ

ガシッ！
「・・!?」
（（ニセかなえを盾にして・・・!!））
ウィンドウアンカーで捕らえた偽物のかなえを盾にし、やちよの追撃に備える。最悪、このシズクアーマーを犠牲にすれば・・・
「”Ｔｈｅ（吊）Ｈａｎｇｅｄ（し）Ｍａｎ（人）ノ逆イ置”、ドウあガいても”ムダ”ニ終わルワ」
グジュ！
『あっ・・・っ・・・』
致命的な一撃により、拓未は変身解除されていた。心臓を避けたとはいえ、捕まえた偽物のかなえで、新たな魔法少女の形を作っていたのを予想していなかった・・・

私は何も出来ずに、ただ”見ている”ことしかできませんでした。例え”役に立てなくても”、こうなる未来を避けられる筈なのに。
「ッ!!・・・・拓未さん!?」
ポタッ・・・
「努力シタノに、かわいソうな人。マモッてイるのニ、まモラなイトモだチ」
「ち、ちがっ・・・」
『ゴホッ!!』
「ミテ・・・・トッテもキれイ。ホら・・・アなタのトもダチのチよ」
聞きたくない音が聞こえた、”人の血肉が抉れる”音が耳にこびり付く。どうして止められずに、私は立ったままなんだろう？

――デモ、ワタシハ”無事”ダヨ？
違う、拓未さんが血を流してる。
――ソレデモ、”使い魔”ニスラカテナイヨネ？
違う、勝ち負けの問題じゃないよ。
――デモ、ワタシハ”逃げる”コトシカデキナイヨ。
違う、私は・・・

チガワナイヨ、ダンダンハナレテルヨ？

「え・・・」
私は”震えた自分の足”と、さっきよりも離れた位置で”見ている私”を認識してしまった。

違う・・・
違う違う違う違う違う違う違う違う違う
違う違う違う違う違う違う違う違う違う
違う違う違う違う違う違う違う違う違う
違う違う違う違う違う違う違う違う違う
違う違う違う違う違う違う違う違う違う
違う違う違うちがうちがうちがうちがう
ちがうちがうちがうちがうちがうちがう
ちがうちがうちがうちがうちがうちがう
ちがうちがうちがうちがうちがうちがう
ちがうちがうちがうちがうちがうちがう
ちがうちがうちがうちがうちがうちがう
ちがうちがう・・・・・

ズズズ・・・
徐々に穢れが満ちていく、私のソウルジェム。そしてやちよさんと同じ、”白い仮面を被った私”が後ろから抱きしめて、耳元でこう囁く。
〔”メヲトジテ”。ツギニオキタトキニハ、アクムハオワッテルヨ〕
うん、こんな”悪夢”なんて見たく無いよ。

（だから、モウ…）

――ダメだよ、お姉ちゃん

（ダレ…）

――お姉ちゃん、ヒーローが呼んでるから。

いろはちゃん!!

（…!!）

――――――――――――――――――――――――――――

― ― ― ― ― ― ― ― ― ― ―

Ｈｏｗｄｙ、元気かな?

今の私は、ヒーローじゃない。つまりは、〝変身〟していないよ。とてもじゃないけど、今の状態をいろはちゃんには見せたくなかったのにね。

「ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ッ゛ッ゛ッ!!!?」

『いろはちゃんは…悪くない…!!』〟

私は穢れを吸う事で、魔力へと変換できる。それがもう一つの、やちよちゃんを救う鍵。グリーフシードでは吸い切る前に魔女が孵化するけど、私なら…

「ハ゛ナ゛レ゛ナ゛テ゛ェ゛ェ゛エ゛エ゛エ゛エ゛ッ゛゛ッ」

ブン! ブン!

『離す…　もんか…　!!』
シュウゥウ…

やちよちゃんから吸い出した穢れは、私の魔力となって自然治癒力も平行して高まる。傷口は徐々に治り、血痕を残して傷跡が消える。
そのまま吸い続けていると、白い仮面の右半分が消えて、やちよちゃんのＰｒｅｔｔｙ　Ｆａｃｅ（素顔）がやっと見えた。
『やちよちゃん、どうして欲しい?』
『Ｔｈａｔ　ｉｓ　ｎｏｔ　ｗｈａｔ　Ｉ　ｗａｓ　ａｓｋｉｎｇ
「早く殺して…」〔イヤヨ、シニタクナイ!!〕
（聞きたいのと違うよ?）』
「もう嫌よ…〝他人を犠牲にして生き残る〟なんて…」
〔ワタシハシンジャダメナノヨ!!　ゼッタイニ、カッテニシネナイッ!!〕
もうＤｏｐｐｅｌ（本心）が必死に語ってるのに、とうの本人は頑固なままだ。〝３日目〟と〝７日目〟に会った時とは、本当に凄い変わりぶりだよ。
だったらさ…　もう一回、この言葉を送るよ。
『やちよちゃん!!』
「!!」〔!!〕
『キミが何で誰にも知られずに、ひっそりと死のうとしたのかは知らない』
「――――嘘…」

――――――――――――――――

冷たい色に染まる、夜の町…
私は廃墟ビルの最上階で、命を絶とうと歩みだして行った。今まで願いに犠牲となった魔法少女（なかま）達のバトンを背負い、ついにやっと諦めが付いた日に…

――あの人が現れた

『Ｈｏｗｄｙ（やあ）、こんなひとけのない所で何してるの？』

「・・・・ 帰って」

『Ｈｅｙ、せっかく来たのに” 何も知らずに” 帰れないでしょ？ Ｌｅｔ’ｓ，Ｐｌｅａｓｅ ｔｅｌｌ ｍｅ ｔｈａｔ ｒｅａｓｏｎ（さあ、理由を教えてよ）』

「・・・ フフ、” 懺悔” でもしなさいと？」

『悪いけど、修道女じゃなくて” ヒーロー” なんだ。人生経験豊富なヒーローなら、答えてくれるかもよ？』

「・・・ そうね、教えてあげるわ。” 自称ヒーロー” さん」

『” 自称” は取り消そうか』

――リーダーとして生き残りたい

「そう願ってから、みんなが死んでいったのよ。まるで私の願いが、みんなを代償に叶えるように・・・・」

そうよ、最初からこうすれば良かった!!

「もう疲れたのよ、これ以上誰かが” 犠牲になるの” を！」

そして私は飛び降りた、これで誰かが犠牲にならずに済むんだって・・・・・

パシッ！

『Ｇｏｏｄ、ｇｏｔｃｈａ！（よし、捕まえた）』

どうして・・・・

「どうして、死なせてくれないのよっ!?」

『・・・・ ヒーローだからね』

そんな理由が、私を死なせてくれなかった。

もう嫌なのに・・・・ やっと決心がついたのに・・・

『キミが何で誰にも知られずに、ひっそりと死のうとしたのかは知らない』

「離して・・・ 一緒に落ちたくないでしょ・・・」
『大丈夫、救助なんて日常生活さ。だから、こんな時に”決まり事”がある』
「いいから、離して!!」
『助けを呼んでみなよ、”ヒーロー”は必ず助けに来るからさ!』(?☒・)—☆
「・・・・・」
私は今になって後悔した、”まだ死にたくない”だなんて。次にあの人の顔を見た時には、ヒドい顔になってたでしょうね・・・ 私
「————————————

う意地を張って、いろはちゃんに近づいて抱きしめた。

『・・・ いろはちゃん!!』

「・・・・ 拓未さん・・・ ?」

いろはちゃんは顔を上げて、私が目の前に居ることが信じられないかのように目を見開く。

『ごめん・・・ 今の私はヒーローじゃないんだ・・・・ 一人だけじゃあ、助けられない・・・・』

「・・・・・」

『だから・・・ 一緒に戦ってくれないかな?』

ギュッ!

「――――勿論。私達は・・・”仲間”じゃないですか・・・」

『ありがとう』

〔マトメテシニナサイ!!〕

『まだ、戦える!!』

拓未は1段目の槍を屈んで避け、次にいろはを抱えてバックステップで2段目の槍を上手くに避ける。いろははやっと現実と向き合ったからか、密着してる間に溜まった穢れが吸われたからか、瞳に輝きが戻っていた。

私はちょっとボロボロだけどね。

「・・・・ 拓未さん、どういう状況何ですか?」

『Ｏｎｅ?あと一歩で、やちよちゃんを助けれそう。Ｔｗｏ?助けるには、私が穢れを吸い取ること。Ｔｈｒｅｅ?一緒に戦えばイケる。ＯＫ?』

「でも、私じゃあやちよさんには・・・・」

『今からおまじないをかける、私と手を合わせて。そうすれば、やちよちゃんに力負けしないから』

「・・・・ はい!!」

パンッ！
手を合わせると、互いの魔力（穢れ）が行き交う。穢れって言うけど、その中には”欲望”ってものがある。今の私達の欲望は、”誰かを助ける力が欲しい”こと。
――――だからそれぞれの力が、望んだ形となって相手に送られる。

【ＣＯＮＮＥＣＴ（コネクト）】
『Ｏｎｃｅ（もう）ｍｏｒｅ（一度）…』

「さあ、ヒーロータイムです!!」
『Ｉｔ’ｓ ＨＥＲＯ Ｔｉｍｅ!!』

〔イマサラフエテモ… ムイミヨ〕
スチャッ！
仮面やちよは、いくつもの槍を展開し… 雨のように射出される。その雨を前に、拓未は正面から向かう。

『それでも… !!』
【限定変身（リミテッド・シフト）：アルトリア・ペンドラゴン】

ガキンッ！
〔ッ… マダマダノコッテルワヨ!!〕
姿を変えることなく風を纏う不可視の剣を手にし、その剣で次々と飛んでくる槍を薙ぎ払う。それに対し仮面やちよは、再度展開しようとするが…

「させない… 届けっ!!」
バシュンッ！
【ストラーダ・フトゥーロ】
ダダダダッッ!!
!!

〔アナタノコウゲキナンテ・・・ ‼〕
天より降り注ぐ矢の雨、今のやちよでは通じもしない必殺技（マギア）。それに託された、拓未の願い・・・ 退魔の弓へと変えた。
〔ア〞ア〞ア〞ア〞ア〞ッ〞ッ〞ッ〞!!!〕
『痛いだろうと思いますが、私の腹を貫いたツケです！ そしてこれが、いろはちゃんの・・・・』
【―変身―（シフト・チェンジ） 解除（アウト）】
ピカッ！

勢いのまま矢の雨に突っ込み、やちよに直撃して二人纏めて雨の外へと通り抜けた。やちよの上に拓未が上に覆いかぶさる状態（拓未の胸は、やちよの顔下半分埋もれてる）。

それでも2人は、傷一つもなく消えていた・・・

『〞傷一つのない〞願い。やちよちゃん、待たせちゃった？』
モゴモゴ・・・
「――――遅すぎるわよ」
拓未はいろはに視線を向けると、いろはは苦笑いで応える。

『「〞ヒーローは遅れてやって来る〞ものだよ（です）」』

Ｅｐｉｓｏｄｅ０５【Ｗｅ ａｒｅ ｇｏｉｎｇ ｔｏ ｊｕｓｔ ｍｉｓｓ ｅａｃｈ ｏｔｈｅｒ！ ／ すれ違いな出合い】

『Ｂｒｅａｋｆａｓｔ ｉｓ ｏｎ Ｉｒｏｈａ（いろはちゃん、朝食の準備はできたよ）、出来立てのうちに食べるよー！』

「はーい！」

お久しぶりです、皆さん！

転校が決まった、いろはです♪

あの戦いから3週間近くが経ちました。あれから拓未さんとの生活も慣れ初めて、神浜市での救助活動をしながら、今では朝食の準備を任せてます。

「今日は和食なのね、いつも和食ならカロリー計算に困らないのだけど……」

『Ａｎｙｔｈｉｎｇ ｉｓ ｏｋａｙ ｉｆ ｉｔ，ｓ ｄｅｌｉｃｉｏｕｓ（美味しければ、何でもいいじゃん）。いつもお代わりしてるんだから、カロリー計算なんて説得力ないと思うよ？

それでもクレームがあるのなら、もう少し量を減らしておこうか♪』

「……　1日くらい朝食の量を多めにした方が、精神面に良いわよ」

――どうして、私の家にやちよさんが!?

なーんて♪

今住んでるのは、私の家じゃなくてやちよさんの家なんです。あの戦いが終わってから何があったと言うと、やちよさんも仲間になりました！

「おはようございます、やちよさん」

「ええ、おはよう環さん。今日から新しい学校生活になるけど、困った

ことがあれば、私か拓未（お節介ヒーロー）に言うのよ？」
「はい、今日からお世話になります!!」
実はやちよさんにも、神浜市に来る理由を説明しています。そうすると”神浜市で暮せば活動しやすい”という提案で、昨日から拓未さんと共に住まわせて貰ってます。（ちなみに生活費とかは、”拓未さんが家事などを、やちよさんの代わりにする”という条件です）
パンッ！
「『「いただきます」』」
”白いごはん”
”えのき茸と具だくさん味噌汁”
”カボチャのきんぴら”
”あんかけ五目厚焼き玉子”
”鮭のみりん醤油焼き”
”一口豚カツ（共有大皿の６人前）”
一週間ぶりの和食。拓未さんが”いろはちゃんとやちよちゃん（は弁当で）の好みを調べたい”と言って、色んな国の家庭料理を出して来たけど、やっぱり私は拓未さんの和食が一番のお気に入りです。
ですが・・・
（（足りるのかな（かしら）・・・？））

――とか、思ってるよね。
これでも多い方だと思うんだけど・・・（（汗））
Ｈｏｗｄｙ、みんな元気？
いつもＷｉｆｅ（妻）ポジな拓未ちゃんだぞ♡
バブれ（豹変）

そんなこんなで、やちよちゃんの愛人みたいな専属メイドになったよ。ヒーローだったり、元男だったり、現在の性別的に人妻だったり、私の属性がレインボー文明じゃないか・・・・（マナに置く時はタップしてね）

あのツンデレ過保護ギリ未成年魔法少女”やっちゃん”のＨｏｕｓｅで住むことになり、ある意味で原作通りになりました。

「一時さん」

『ん？』

「あー（口開け）」

『うん、あーん』

パク

「♪」

やちよ殿、ロリコン属性はいずこへ・・・？

彼女と強く関わり初めて一週間、年齢詐欺の甘えっぷりよ。さてはオメー、やっちゃんの幻影を被ったみっ・・・ふゆうちゃんだろ（（？―？））

まあ・・・原作よりも多くの魔法少女の死を見送ったからか、かなり精神面で我慢しててタガが外れたんじゃない？（適当）

▪拓未さん、拓未さん」

▪何だい、えろはちゃんや』

▪誰が”えろはちゃん”ですか。それよりも、最近やちよさんの印象変わり過ぎません？」

▪過去には色々とあったみたいだし、こうしてガス抜きさせた方が良いと思うよ』

▪うーん・・・そうですね、分かりました▪

テレパシーでいろはちゃんが聞きに来たけど、こういった理由の方が彼女の尊厳を守られるのよ？（末期）

黄色い放火後ティーパーティーちゃんも、こんな症状出てたからね。（3敗）この世界のマミさんなら、後輩に格好良い姿を見せられる先輩に戻るはず・・・はずよね？（震え声）

パンッ！
「『「ごちそうさま（でした）」』」
こうしてる間に、我々の朝食は終わった。いろはちゃんは急いで洗面所に向かい、学校に行く支度をする。やちよちゃんも仕事があるのか、電話で誰かと打ち合わせの話をしていた。
そして私は皿洗いと、”弁当の準備”・・・二人の弁当を仕上げてる所ですわよ。（いろはちゃんのは、キャラ弁だぞ♡）
「行って来ます！」
いろはちゃんが初めに出て・・・
「行ってくるわね」
次にやちよちゃんが仕事場に向かいました。
『そんじゃ、イッテキマース！（ＡＩＢＯ声）』
何で私も外出するかって？
ヒーローに休日も給料も無いんだよ・・・・
（あたしって、ほんとバカ顔）
ヒーロー活動もそうだけど、モキュこと小さいキュゥべえはウチに居ないの。これだけで、かなり物語のズレを出しそうなのだわさ。
それに・・・私の仲間も捜索しておきたいからね。
現地（マギアレコード世界）に来た仲間は合計１０人！
Σ（０ｗ０）ウェ!?
”同スペック以上の仲間がそんだけ居れば、マギウスの翼も追い払えた”って？
無理だね（スマイルワールド）
状態異常（デバフ）漬けにしても、高火力技で気絶狙っても・・・・例え肉体の欠損有りでも。
”死ななければ関係なく追いかけてくる、スパアマゾンビアタック

状態の魔法少女軍団”とか笑えない（真顔）
殲滅前提なら可能には可能だけど、”原作ストーリーに関わる魔法少女が他世界出身の手で死亡したら、物語崩壊による世界消滅”とか、確定バッドエンド直行ですよ。それにマギウスの翼に入信しているのは、うろ覚えながら何人か居るし…
『買物、救助活動、次のイベントフラグ、スモールＱＢと仲間探し、やること多いなぁ。はあ… がんばろ』
(???)

――ヒーローの1日は、こんな感じで始まる。

〔キィ…〕
（このコウモリ… ケガしてる）
今日転校する予定の学校から少し近い所で、羽根から血が流してるコウモリが目に入りました…
電柱の陰に隠れてましたが、誰もコウモリに気付いてないようです。それと鳴き声からして、とても弱っています。
（方向音痴のせいで、ホームルームまでの時間はあまり無いけど…）
〔キー…〕
（でも、放っておけない… よし） キョロキョロ
あのコウモリを見ていると、何故か”他人事”のようには思えません。それから私は、周りの人が少なくなるタイミングを狙ってコウモリに近付きます。
〔――!? キィッー!!〕
「落ち着いて、傷を治すだけだから…」
【治癒魔法】

私に気付いて警戒してるから、少し距離をとって回復魔法で傷を治します。普段よりも回復に時間がかかったけど、問題なく傷がなくなりました。

「――これで大丈夫、痛くない？」

〔キ？　・・・　キィ♪〕バサッ！　バサッ！

「良かった、また怪我しないように気を付けてね！」

ダッ！

私は傷を治し終えると、学校のホームルームが始まる前に間に合うよう走り出しました。それにしてもあのコウモリ、何かちょっと人っぽい反応をしてたような・・・？

――――――

大雑把に要約すると、”日本語でＯＫ”という意味です。
この魔法少女、”ふゆ”の二文字しか言ってないんだぜ？
冬はまだまだ半年も先だよ（）
???? ????? ?????
??? ??? ???

『そんなの、決まってるよ。
――Ｉｔ，ｓ　ＨＥＲＯ　Ｔｉｍｅ
（さあ、ヒーロータイムだ）!!』
【―変身―（シフト・チェンジ）】
ピカッ！

青紫の鎧とバイザーに水色の発光ライン、両腕には剣の鞘のような武器が付いた手甲（バンカー）。身長は１４０あたりまで低くなってる。見た目通り体重がかなり軽そうな幼女で、白いロングヘアーが特徴的だ。
『妖精騎士ランスロット!!　え…　まだ真名どころか前半すらクリアしてないのに、もう変身できるんだね』
「えっ…　レナちゃんと同じ魔法なの!?」
『うーん、!!?それは少し違うね』
［［Ｖ゜▪×］］シャァァァッッ!!
ダッ!!???
『さてさて、飛行はＯＫ…　アロンダイトも問題なし。しかもこのバイザー、かなり高性能だね！　ボクも久しぶりに、男の浪漫が蘇ってくるよ♪』
「ねえ、魔女の使い魔が来てるよ!?　早くしないと…　!!」
ビュンッ!!
「きゃっ!?」
『早く？　今のボクには、〝遅過ぎ〟て見えるよ』
ジェット機がそばで発射したかのような爆風が起き、魔法少女は思わず目を瞑って腕で風から守る。だが…　すぐさま爆風は収まり、そこで再び目を開けると――
――血肉を斬る音もなく、一体の使い魔を残し、笑顔を見せる白髪の少女が隣で肩をすくめている。

あの目を瞑った一瞬の間に、周りを囲んで襲いかかった使い魔が切り刻まれて消滅していたのだ。

『これだけあれば十分。かえでちゃん、魔女戦始めるから。”吹き飛ばされないよう”、下がっていて』

［S???ｒｒ?・・・!!］

『その意気や良し、誤魔化しなんて必要ない。今からオマエを望み通り”嬲って”やろう』

魔女の擬態は解け、魔力量も本来のスペックまで戻る。その瞬間、魔女は一瞬にして拓未の前へと迫る。

ガッ！

『ねえ、次は？』

［――――？ッ!!］

ヒュンッ！

ガガガガガガガッッッ!!!!!!

魔女は手足に加え、首から生えた尻尾で次々と連撃を繰り出す。それを二刀のアロンダイトの鞘と小柄な体型から出せるフットワークを駆使して受け流す。

『――――次はボクの番だ』

ゴッ！

ブォウッ!!

［???!?］

『地???砕きから、巻き上げ！』

拓未は魔女に殴りかかり、バンカーはそのまま地面に空振る・・・筈が、そこから魔力の衝撃波で魔女を吹き飛ばす。そのまま手を緩めず、バンカーに付いている剣の鞘の部分にも魔力の刃を展開して巻き上げるよう斬りつける。

『はぁぁ……でやぁ！』

バキッ!!

『右!・左!・正面!・左!・左!・正面!』

ガガガガガガガガッッッ!!!!!

そこからは一方的な展開へと変わり、そのバンカーで重い一撃を入れてから連撃を仕返しとばかりに繰り出す。魔女のトゲは砕け散り、甲殻に、骨に、そして血肉へと削ぎ落とされる。

〔・・・!!〕

ズルッ!??????????!

魔女は最後の足掻きとばかりに脱皮して、新しい肉体へと再生させ、自身以上に口を大きく開けて呑み込もうとする。

『暴れるな、楽にしてやる』

シュゥゥ・・・!!

『カットライン・・・

ラァァァァンスロットォォォオオッ!　』

バンカーから先程以上の魔力放出を行い、魔女の内部から閃光が喰い破る。その強過ぎる光は、魔法少女――秋野かえでには忘れられない光景となった。

――――――――――――――――――――――――

「はぁ・・・　今日は、もう疲れちゃったよ・・・」

転校生ならば誰でも体験するであろう展開に、いろはは疲れ切って小さいキュゥべえを探す予定を断念することとなった。

(明日は土曜日だし、別に今日じゃなくても・・・)

――――アンタ、そこで止まりなさい!!

「え？」
　私を呼び止めた誰かは、走って近づいて来る人物を見て名前を呼ぶ。あの水色の髪に、特徴的な胸を持つ魔法少女は・・・・

「レナちゃん？」
「丁度いいトコロに居たわね！　レナと”かえで”を探しなさい、拒否権なんて無いから!!」

「――――ええ・・・（困惑）」
　疲れて帰りたい私に、明らかに”人に頼む態度”じゃないのに、巻き込もうとする自己中心的なことを言う魔法少女がやって来ました

Episode06【Would you like some dessert?／甘味に勝てる女子はいない！】

『それで――――　かえでちゃんは、その”期間限定のスイーツを、レナちゃんから買いに行くよう”言われたけど、道中に魔女の結界に巻き込まれて現在に至ると？』

「えっえーと・・・・はい、そうです」

『Umm・・・That sucks（うーん、災難だったね）』

Howdy、みんなの好きなスイーツは何かな？

人生相談の拓未だよ（大嘘）

前回は妖精騎士ランスロットに変身して、情報不足による出力不足状態の筈なのに無双しちゃう。戦いを終えて変身解除したら、”Arche（原）-type（型）”が増えた感覚があったので、今後からまた使える。

最近ヒロインXXや閃刀姫レイは修復中なので、少しでも強くて新しい変身先が増えれば色々と助かるよ。

最後に・・・・ストーリーの時間軸を知る為にも、最近レナと”絶交”してないかの確認を遠回しで聞いてみる。（結構な頻度で絶交の言葉でドッジボールしてるみたいだけどネ！）

「どうしよう・・・またレナちゃんが不機嫌になっちゃうよ・・・」フユウ・・・

『There（後）’s（悔） no（し） use（て） crying（も） over（仕） spilled（方） milk（な）（い）

今日がダメなら、また明日からでも買いに行けばいい。人間生きてれば、次がまた来るさ』
「もし・・・〝今日食べたかった〟って、言われちゃったら・・・」
『それは別にキミの仕事じゃないだろ？　仲間なら尚更、嫌なら嫌って言うべきだよ』
「でも・・・・」
『その時は、私がどうにかするよ。そのスイーツが霞むぐらい、美味いのを作れば良いだけだって！』
「う・・・　うん・・・・」
　何か納得して貰えてないけど、多分どうにかなる。こっちは家事全般出来る弓兵からの直伝で、困った時のレシピ一覧も貰ってるからね!!
・・・　レシピが気になるの？

――ごめん、〝絆礼装（専用マギア）〟なんだ♡

『まあ・・・　まずは、胸元パンパン少女を探さないとね？』
「〝胸元パンパン〟・・・？　もしかして、レナちゃんのこと!?」
『ああ!!（デュエリスト感覚）』

――――――――――――――――――――――――――――――

「アンタ、よく今日まで生き残れたわね」
「アハハ・・・・」

　今私達は、神浜総合病院前の公園に居ます。
　あの後、調整屋にも訪ねていました。そこでみたまさんに会いましたが、〝そう言えば、調整の途中だったわぁ～〟と、無償・・・　拓未さんの先払いで、ソウルジェムの調整を受けました。その過程で夢の女の子と出合い、声は聞こえなかったけど・・・　顔をハッキリ確認出来た

のは大きな収穫だと思う。
「本当にアレの過保護っぷりは、辻金入りじゃない？」
「拓未さんは・・・・ 確かにそうかも」
　それでもそれは、特別私の為なんかじゃない。目の前に手を差し伸べられるのなら、後悔する前に行動する人なんだ。現に私だけじゃなく、やちよさんだって救ってみせた。
「だからって、自分を大事にしないのは酷いと思う。私はもう二度も見ちゃったから、無茶してないか心配で目が離せないよ」
「――そっ、精々頑張りなさいな」
「うん、頑張るね」

『おーい！』
「レナちゃーん！」

「かえで!!　アンタ、今までどこに・・・・ なんでアンタまでいんのよ」
「拓未さん、どうしてかえでちゃんと・・・・」
　レナちゃんがようやく、かえでちゃんを見つけたかと思うと・・・ 何故か一緒に居る拓未さんに嫌な顔で視線を向けていました。それはそれとして、どうして一緒にいるのか気になります。
『何か魔女に襲われていたから助けた（かえでに指を指しながら）』
「スイーツ買いに行ったら、魔女の結界に巻き込まれちゃって・・・・」
「は？　それって、〝買い損ねた〟ってこと？」
「う、うん・・・・ ごめんね、レナちゃん」
「ホンッ・・・ と、信じらんない!!　頼んだものも買えないわけっ!?」
「え、レナ・・・・ ちゃん・・・・ ？」
「ふっ・・・ ふゆぅ～・・・」
　かえでちゃんがお使いを頼まれて、魔女のせいで買えなかったみたいだけど・・・・　明らかに、拓未さんを話題に出してた時よりも機嫌が悪くなっていました。
　レナちゃんがかえでちゃんに怒鳴っている間に、拓未さんがかえで

ちゃんの目の前に割り込みます。

『落ち着くのよ、おっぱいレナちゃん。こんな町中で大声をあげては、エレガントではありませんですわよ』

「”おっぱい”言うなっ!!」

ザワザワ

「あっ・・・・は、ハメたわね・・・・!!」

『煽り耐性０で、おハーブ生えますわよ♪』

「こ、コイツゥゥゥウウウ!!」ウガー!

「ま、待ってレナちゃん!!」ステイ、ステイ!

((拓未さん・・・・))(?―?)

((別に、おちょくるのが目的じゃない。最近では”絶交ルール”なんて縁起の悪いウワサもあるし、ここは食卓に誘って満足なおもてなしで仲良くさせるさ))

((あっ、そっか! 拓未さんの料理だったら・・・・!!))

確かに拓未さんの料理なら、やちよさんからもお墨付きです。でも、それって・・・・

『煽ってなんだけど、買えなかった代わりに私のデザートでも食べてかない? Ｈｅａｖｅｎ ａｎｄ Ｅａｒｔｈの差くらい驚かすよ』

「何で”天国”と”地球”が出て来るのよ?」

「拓未さん。 そこは”天と地の差”と、普通に言いましょうよ・・・・」

『そこは癖で言ってしまうんだ、諦めて欲しい』

「はんっ! どうせ不味くて、出来の悪い形のデザートでしょ?」

「そ、そんなこと言っちゃダメだよ、レナちゃん! ((知らないと思うけど・・・・ 調整屋さんが食べてるプリンは、あの人が出してるんだよ!?))」

「((は、はぁ!? アレって、調整屋が常連相手でも出さないって噂の・・・・))」

――――――――――――――――――――――――――――――――

――――知らない皆さんに説明します。

冒頭で拓未さんが調整屋さんに”何で”先払いしてたのは、拓未さん手作りの”プリン（品質や鮮度を保つ魔法込み）。
これは調整屋さんが食べる分は勿論、商談で負けられない相手への最終兵器に化ける。偶々食べれた魔法少女の証言を元に、調整屋に通う魔法少女達の噂になってます。
それは味音痴でも、等しく美味しいと言わせる魔法のような味。気になった魔法少女達は色々と手を尽くすも、結局分からず終いで”噂に尾ヒレが付いただけ”という結論で匙は投げられたそうです。

―――――――――――――――――――――――――――――――

「((あの人も”後で帰ったら、今晩もまた調整屋に新しいの作らないと”とか、ももこちゃんも”夜中には閉まってる調整屋に入ってくる魔法少女が居る”って言ってたの共通点があるもん!!))」
「へ、へぇ～。どうせ虚仮威しで自信過剰なだけでしょうけど、仕方ないからレナが行ってあげても良いわよ?」
『うわー、腹パンしてやりたい台詞』
「え、腹パン?」
『ナンデモナイヨー（棒）　行きたかったら、二人共目を閉じてくれない?』
「「・・・・　?」」
疑問に思いながらも、目を閉じてジっ・・・　と待ちます。多分あの魔法を使うので、私も目を閉じます。
『ほーい、”Ｓｉｌｅｎｔ　ｍａｇｉｃ・Ｍａｓｓ　ｔｅｌｅｐｏｒｔａｔｉｏｎ”』
シュンッ!

―――――――――――――――――――――――――――――――

パチッ
「――――え”、どうなってるのよ!?」

「さっきまで私達、公園にいたはずなのに・・・？」
「転位魔法だよ、レナちゃん、かえでちゃん。私も最初は、とっても驚いてたよ」
『アレを初見で目を開いてやると、気分が悪くなる人が多いからね。レナちゃん達に目を閉じるよう言ったのも、こういう理由さ』
　レナちゃん達は自分達が何処なのかを知ろうと、周りに看板が無いか探す。・・・・ と言っても、やちよちゃんの家の前なんだけどね。

「あら、今日は珍しい客ね」
「アンタって確か・・・・」
「”やちよ”よ、どういう理由でこっちに来たのか聞きたいのだけど・・・・」チラッ

『ああ、ちょっと手作りのお菓子を試食させるだけだよ。やちよちゃんは、何が良い？』

「そうね・・・・」
「それでしたらパフェなんてどうです、やちよさん？」
「”パフェ”・・・・ そうね、悪くないわ。材料はあるのかしら？」
　やちよちゃんは思い悩んでいると、いろはから提案を出され、そのまま採用される。心配なのは”材料があるかどうか”だけど・・・・ 私は両手の買い物袋を見せて、ソレにやちよちゃんは頷いて全員家の中へと入った。

　事件発生まで、あと1時間後・・・

Ｅｐｉｓｏｄｅ０７【Ｉ　ａｍ　ａ　Ｃａｓｔｅｒ　ｔｏｏ！／　魔術師の妖精】

「一時さん・・・　この状況を分かってて、やったのかしら？」
『Ｆｉｆｔｙ（五分）—Ｆｉｆｔｙ（五分）　さ！　”Ｃａｎ（予）　Ｉ（約っ）　ｍａｋｅ（て）（取）　ａ（れ）　ｒｅｓｅｒｖａｔｉｏｎ（ま）（す）？（か？）”とでも、早めに言えば良かったかい？』
「初日で家を事故物件にするくらい、前々に言いなさいよ!?」
「拓未さん、やちよさん、今は喧嘩してる場合じゃ・・・　もう、当たって!!」
　バシュッッ！
［ＶＥ???＊}▪!?］シュゥゥ・・・
［▪∀∀▪!!］――［☒▪∀∂!!］

　こんな切羽詰まった状況になった理由は、１時間前に戻る・・・・

――――――

繰り出し、そしてまたたく間にフレーバーをいくつも用意する。
なーに。余った分は、後で調整屋に押し付けるさ。

『試しに味見するか？”ストロベリーチーズケーキ”だ』スッ
「・・・・ いただくわ」
やちよは”魔法を料理に使う”という、そんな未知の常識に少し躊躇しながらも、彼女の腕前もあって試食しようと一口のアイスを乗せたスプーンを口に運ぶ。
「なに・・・・ これ・・・・ 市販のよりも、全然美味しいじゃない・・・・!?」
『Of course, I don't work out for nothing』
「こんな美味しいの作れるのなら、もっと早く出しておきなさいよ。仕事帰りに毎日食べていたいわ・・・・」
『あら、”肥満の素”ですわよ～♪』
「――――そう言えばさっき、”魔術”と”魔法”って聞いたのだけど・・・・ 何が違うのかしら？」

このギリ未成年モデル、話題をすぐにshiftさせやがった・・・・
まあ・・・・ それはそれで勉強になる内容ではあるから、作りながら話をする内容にはなるか。

『そうだね・・・・ やちよちゃん達の世界や、その他の世界だと誤差はかなりバラバラになる。だから、まずは私が住む世界を基準かつ前提で話すよ』
「ええ、それで進めて」
『まずは”魔術”だね。コイツの場合は魔力と基本的な魔術行使する感覚、これさえ分かれば誰でも練習すれば理論上出来る。
性質としては”科学で実現可能なら、工程を飛ばして実現させる”、ただし魔力・・・・ やちよからすれば穢れに近い魔力を対価にしてるのが特徴だ』
「”科学で実現可能”・・・・ それってかなり曖昧よ？」
『そうだね・・・・ コレのせいで魔術が使えなかったり、使えても一部だ

けってのもある。それならやちよちゃんは、魔法で水をどうやって出したんだ？』
「普通にイメージすれば・・・」
『そこで躓くんだよ、〝有り得ない〟って常識的な固定概念が邪魔してしまう。私なら強めの水魔法を使うとしたら、〝自分を津波だと思って〟相手に放つんだよ。
今みたいにアイスを凍らせるのも、〝扇風機を持って相手に風を当てる〟イメージと〝雪山の冷たい空気を肌で感じるイメージ〟を合わせて発動してる』
「それなら別に〝科学で実現可能〟なんて制約は・・・　もしかして、どこかで〝不可能〟だと思うから？」
『〝工程を飛ばす〟だけで、知らないことをやれと言われても出来ないでしょ？青空を飛ぶのには〝羽根〟やら、〝薄い足場を作って浮いたように見せる〟でも通じるんだ。それが大雑把になればなるほど〝対価は大きくなる〟ってことで、〝イメージ〟，〝知識〟，〝支払う分の魔力〟があって初めて魔術が使えるんだ』

こんな分かり難い説明を先生ぶって話すが、私なんてまだまだ〝にわか〟でしかない。コレには魔術師の先輩達へ感謝＋α、実際に我々〝異世界の抑止力（ＤＩＭＥＮＳＩＯＮ　ＷＡＬＫＥＲ）〟も生活と戦闘を共に役立ってる・・・・

だからって、〝人体実験〟や〝人攫い〟とかは見逃さないよ
（これはこれ、ソレはソレ案件）

「それって、私達でも使えたりは・・・」
『簡易かつ下位互換を、普通に使ってるぞ？　料理で例えるなら・・・・魔法少女の使う魔法は、私達抑止力からみて〝インスタント麺〟で料理対決してるように見える見える（幻覚）』
「なら尚更アナタの魔術を、環さんに教えてあげたらどうなのよ？」
『やちよちゃんは使いたくないの？』

私の質問に、やちよちゃんは首を横に振る。まあ、リハビリ中の私にタイマン張れるもんね。結局それは闇人格（笑えない）のやちよちゃんじゃないと、魔法を使いこなせないみたいだけど・・・・ それでもベテラン魔法少女の中では上位に食い込んで行ける。

『そのうち教える機会はまだまだあるし、いろはちゃんの成長具合で考えれば良いさ。さっきメールで、調整屋から”ソウルジェムの調整を終わったわぁ”って確認したし』

「そんなの、経験が無ければ付け焼き刃よ」

『猛獣相手に武器なしで挑むよりかは断然マシでしょ？　そもそも、比べる相t

――――え、嘘でしょっ!?　こっちだって、結界張ってるんだけど・・・!!』

ズズ・・・・ ズズズ・・・・ ズッ

私が気づいた時には、周りに魔女の結界のようなモノが展開されていた。そこら中に”もう聞いた?”という文字が浮かんでおり、魔女の使い魔と思われる何体もの空飛ぶ錠前が取り囲んでいた。

――――――

「レナちゃん!?」
　長い間こっちが数の暴力に対応が遅れている間に、使い魔達は隙を見てレナちゃんを攫っていく。もしこのままかえでちゃんも攫われてしまうと、下手したら手詰まりになってしまう・・・・!!
　[???⊠↘>!!]バッ！
「一時さん、変身・・・ 出来ない・・・ のっ!?」

『まだ！ ・・・ お願い、早くＣｏｏｌ Ｔｉｍｅ終わってよ・・・ !!』
　途中ヘマをしてしまい、一度変身解除させられてる。ジャンヌ・ダルクのとある宝具を使い、自爆してしまったからだ。今は魔法で応戦してるが、威力は足りても手数が足りていない。

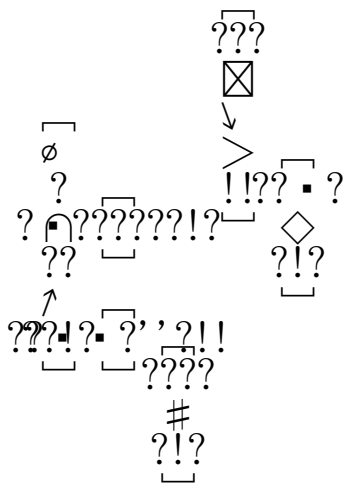
　ビリッ！
『・・・ !! よし、Ｉｔ，ｓ ｈｅｒｏ ｔｉｍｅ（さあ、ヒーロータイムだ）!!』

【―変身―（シフト・チェンジ）】

『”アルトリアキャスター（再臨２）”――もうこの際、誰に変身しても構わないんですよ!! 思ってたのと違うけど、この姿でも負けないぞぉ！』
「拓未さん、ヤケになってません!?」
『いろはちゃん、そこ指摘しない!!』
　私は選定の杖を大きく振り上げ、杖からは眩い光が発する。使い勝手は変身してない時の私と大差はないから、第三再臨まで時間を稼がないと・・・ !!

『選定の杖よ・・・ 打ち払え!!』
　パァァァァァッッ!!

「ま、待ちなさい!? れ、レナが残ってるんですけどぉぉぉぉぉっっ



!!?」

『クッション・・・！　クッション！　もう風でいいや!!』

ブォンッ!!

「きゃあ!?」

拓未は使用可能な魔術がガラッと変わってる為、思いつく魔術を片っ端に使う。クッションでは衝撃を抑えられないと見て、最後は下から上に向けて強引に強風を発生させる。

その結果としてスカートが捲れるどころか、下半身が丸出しになるくらいガバっと開き、嬉しくないパンチラならぬパンモロに・・・・

やちよは冷たい視線で、かえでちゃんは満足そうな顔で、いろはちゃんは”パンツ見えちゃうよ・・・”と頬を紅くした。ちなみに私は、やちよちゃんに困惑顔で見てます。

「アンタ、もっとマシな方法ないの!?　レナ、恥ずかしかったんだけどっ!!／／／」

『どうせ男の子なんて居ないし、緊急時なんだから文句言わないでよ!?』

「((”男の子が居ない”・・・　ねえ？))」

『うぐっ・・・・　((そういうとこだぞ、やちよぉ!!))』

「((忘れそうになるけど・・・・　拓未さんって、これでも”元男性”だもんね。でも少し、えっちなのはダメだと思います))」

『((別にアレくらいで、ドキドキしないってば!?そもそも自前のがあるし、妻達には逆に襲われるんだから!!))』

「・・・・」ギリッ・・・!!

「・・・・／／／」
『あっ・・・・（顔真っ青）』
自分の弁護を申し立てるつもりが、自分から罪状をペラペラ喋る間抜けという・・・・て言うか、さっきからやちよちゃんが怖い怖い怖過ぎる!!

何であんなに歯軋りするの!?
悪いＰｒｅｔｅｎｄｅｒな元カレと付き合った経験あるから、男性に対しての嫌悪感とか持ってたりしないよね!?

「なに・・・・レナ達を置いて、内緒話なワケ？」
『ち、違うって!! これから元凶である魔女（モドキ）を倒すか、逃げるか話し合ってたけど、〝倒すしかない〟って決まったから!!』
「やっぱり、倒さなくちゃダメなんだ・・・・」フユゥ・・・
「でも、レナ達のソウルジェム・・・・」
レナは拓未以外の魔法少女が持つ〝魔宝石（ソウルジェム）〟を見て、これ以上の戦闘は厳しいと訴える。しかし本来なら戦わず生還を目指すべきだが、拓未がいる時点で些細なことである。

『問題ありません、私なら穢れを吸えるし』
「・・・アンタバカぁ？」
『良いから、黙って吸われてください』
ピト・・・シュウウゥゥ・・・・
私がレナちゃんのソウルジェムに触れると、グリーフシードを使った時と同じように穢れが抜けきる。この光景にレナちゃんとかえでちゃんは目を見開いて驚いてた。

「ど、どうなってるのよ・・・？」
「拓未ちゃん、穢れなんて吸い取って大丈夫なんですか・・・？」
『うん、全然大丈夫。私は魔法少女じゃなくて、魔法使いだし』
「「魔法使い・・・・？」」

『戦いが終わったら説明するから、早く魔女なんか倒そう！そうしたら、さっきの続きでパフェを食べるんだから・・・!!』
「そう・・・ そうね。　邪魔してきた魔女なんて、レナ達がボコボコにしてやるんだから!!」
　レナちゃんがやる気を出した所で、私は穢れを吸い終わってない3人からも穢れを吸い取る。これであと、2，3回くらいは変身し直せそう。

「一時さん、元の姿じゃなくても穢れは吸えるのね？」
『魔術か魔法が使える人物に変身するのなら、問題なく使えます。それと今回の魔女、いえ・・・”ウワサ”についてなんだけどね』
「・・・ そう、一時さんもウワサを知ってるのね。何か勝ち筋があるのでしょう？　教えてちょうだい」
『話が早くて助かります。それで、お願いしたいことが・・・』
「――――分かった、最善は尽くすわ」

　私は次の戦いにどう立ち向かうか、やちよに伝える。作戦はＡとＢの切り替え型、つまりは”やちよちゃん”か”いろはちゃん”のどちらかがウワサを討つことだ。

Ｅｐｉｓｏｄｅ０８【Ｔｕｒｎｉｎｇ　Ｏｆ　Ｗｈｅｅｌ　／　集いしは、星々の願い】

『弾けて！シャスティフォル！』
ボン！　ボボボンッ!!
［？↑???!?］　シュゥゥ…
Ｈｏｗｄｙ、元気にしてますか？
キャスター・拓未ちゃんダヨー（周回し過ぎた顔）

「何へばってんの！　アンタが倒れたら、誰がソウルジェムを浄化するのよ!?」
「お、落ち着いてよ…　レナちゃん!!　さっきもレナちゃんがヘマして、助けに入ったんだから」
「かえではどっちの味方なの…？　それ以上言うのなら、絶交なんだから!!　…　ゴメン」

［▪∀∀▪!!］――［☒▪∀∂!!］
［▪∀∀▪!!］――［☒▪∀∂!!］
［▪∀∀▪!!］――［☒▪∀∂!!］

『もう２３回目エッッッ!!』
道中何度も絶交しては仲直りするせいで、ターゲット集中超えて”Ｉｎｆｉｎｉｔｙ　Ｅｎｅｍｙ（敵無限湧き）”に至ってます。最初は励ましてくれたやちよちゃんも、真顔で涙を流しながら無言で戦ってます（）
あなた達には、人の心は無いのですか…？（震え声）

「ねえ、一時さん・・・ 私はあと何回戦えばいいの？ 別の私に聞いても、クスクス笑うだけ・・・・」
「やちよさん、今別人格にならないでくださいよ・・・ !?」
ゼーハァー・・・ ゼーハァー・・・
『終わったら”何でも言うこと聞く”から、諦めないでください・・・・!!』
「なんでも・・・ ？」
『仕事の手伝いから、好きな献立1品追加を3週間作ってまで・・・ 何でもしてあげるから!!』
「なんでも・・・ ええ、まだ絶望するには早いわ・・・ !!」
キリッ！
？ズバッ！
「▪？？？◇？!？」
「？？？☒↘＞!!」
「？？？＃？!？」
『いいぞー、やっちゃえランサー!!』

フフフ・・・ もう何も怖くない（ドヤトリア顔）
このまま行けば、再臨どころかウワサの討伐も難しくは・・・

ねえ、みんな何で”哀れみの目線”を向けてくるの？

ラ？ンッ↑↑↑↑↑↑ル⇩⇨ラ⇦!!

「うるさっ!?」
『Wha(あの怪物は、)t a nu(なんて五月蝿い)isance that(だろうね!) monster is!』
まあ・・・ あの音を出してるのが、”親玉”でしかなさそうだっていうのは、分かりやすくて結構！
――じゃあ、このままカチコミに行くぞー!!』
アハハ、モットソザイオトセー!!

「ええ、あの遠くからでも見える鐘なんて叩き割るべきだわ」
ヒザマクラミミカキデートアーンソイネ・・・（ｒｙ
「やっぱり、頼り過ぎちゃったよね・・・・？」
「ごめんなさい・・・・」

先程の余計な連戦もあってか、特に拓未は一刻も早く戦いを終わらせて休みたい。（ちなみにやちよは別の目的があり、その内容は察していただけると助かる）

〔ラ？ン⇩ン⇒ラ？↓↓↓アッ？♪〕
「・・・!!」ビクッ！
『みんな大丈夫、落ち着いて。普段どおり、魔女と戦闘をする感覚で――』

――耳障りな鐘のような鳴き声
遠くから見てもハッキリ見える歪な階段、近付けば近付くほど・・・・あまりにも魔女とは似ても似つかない気配に、魔法少女達は改めて気を引き締める。

「・・・・拓未さん、アレって本当に魔女ですか・・・？」
『ううん、全然違うよ。アレは”ウワサ”という存在、ちょっと違うけど”人工的に生まれた魔女”とでも思えば良いかな』
「”人工的に”って・・・・」
『必ず全部が害をなす訳じゃないけど、それでも魔女のように被害者を出す方が圧倒的に多い。　だから今回の敵は絶対に手を抜かないで、アレはもう何人も犠牲者が出てるんだから・・・!!』
「――はい！」

―――――――――――――――――――――――――

アラもう聞いた？誰から聞いた？
絶交階段のそのウワサ

フンだ！キライだ！ゼッコウだ！って言ったら見えないけどそこにある！

もしも仲直りしようとすると、連れて行かれてサータイヘン！

友達を落とした黒い少女に捕まると、無限の階段掃除をさせられちゃうって、
神浜市の少女の間ではもっぱらのウワサ

ヒーコワイ！

【――――絶交階段のウワサ――――】

〔ラン→ンンン⇩ル▶▶ラン⇧？♪〕

[illegible]

親を守るように囲う無数の使い魔・・・・ それはとても人の手では負えない、絶望と向き合うような光景。その黒くてドロドロした存在が、今にも私達を飲み込もうとする。

『好き勝手なんかさせない、宝具簡易展開・・・ !!』

【きみをいだく希望の星（アラウンド・カリバーン）】

［???$?◇!!］［??#??!!］

パキッ・・・・ パキッ！

『まだっ・・・ !!』

魔女とは違い、対人戦と思わせる布陣が見られた。こっちは誰かが欠けた瞬間、敵が好機を逃すほど現実は甘くなんて無い。

「手が足りないかしら？」

『――――お願い!!』

姿形は違うけど、みんなはこんな”絶望”がいつも”道先で待ち構えて居るんだな”って理解してる。

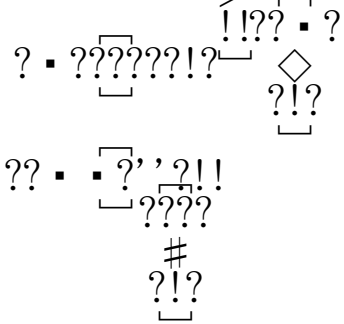
――――それをずっと今も、 無限に繰り返してる。

「分かったわ、出し惜しみなんてしない」

クルッ

トンッ！

【アブソリュート・レイン】



「誰だって喧嘩して、嫌になって離れて、意地になって謝りたくなくて、相手の顔なんて見たくもないって思っちゃうよ・・・・」

昨日の涙を忘れたように、

私達は今日も零してしまうでしょう。

「だからって、そこで終わりなんかじゃないっての!!

レナとかえでみたいに仲直りして、やり直せるのよ!』

――それでも、ここで諦めたくなんてない。

私達のやりたいことは沢山あって、誰もが明日があって、その度に叶えるチャンスがあるんだ。

「行くわよ、かえで!」

「うん、レナちゃん!」

[illegible]

雨にずぶ濡れたままでもいい、

迷いながら何処かに辿り着いてもいい、

ちょっと長い旅になってもいい・・・・

――だから一緒に行こう

「「コネクト!」」

【グロウアップ・ガイア】

[illegible]

「「やった！」」

――この先に何があっても、恐れないで。

最初の一歩を踏み出す為に、

今日の行動（しるし）を残すの。

[ルン⇧ル⇧ラ??ンン?･ラア♪]

ズズズ・・・・

[▪∀∀▪!!]　[⊠▪∀∂!!]

[⊠≧∀▪!!]

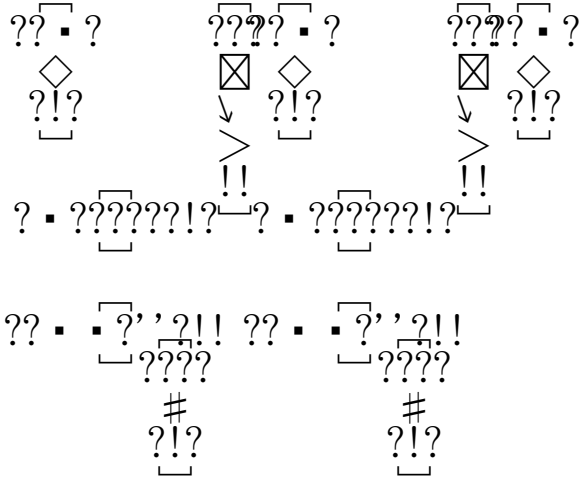
［▪∀∀▪!!］　［☒▪∀∂!!］［☒≧∀▪!!］［▪∀∀▪!!］　［☒▪∀∂!!］
［☒≧∀▪!!］

パキィィィィィィインッッッッッッッ!!!

『っ・・・!!』
「拓未さん!!」
ダッ！
『いろはちゃん・・・!!』
きっと何度も・・・・何度でもいい。
例えそれが・・・・
その星(みち)を間違えたってもいいんだ。

ガシッ！
((・・・・!!))

カッ！
【接続再臨（マインド・コネクト）】
「『撃って、マルミアドワーズ!!」』



「???☒↘＞!!」

「??・???????!?」

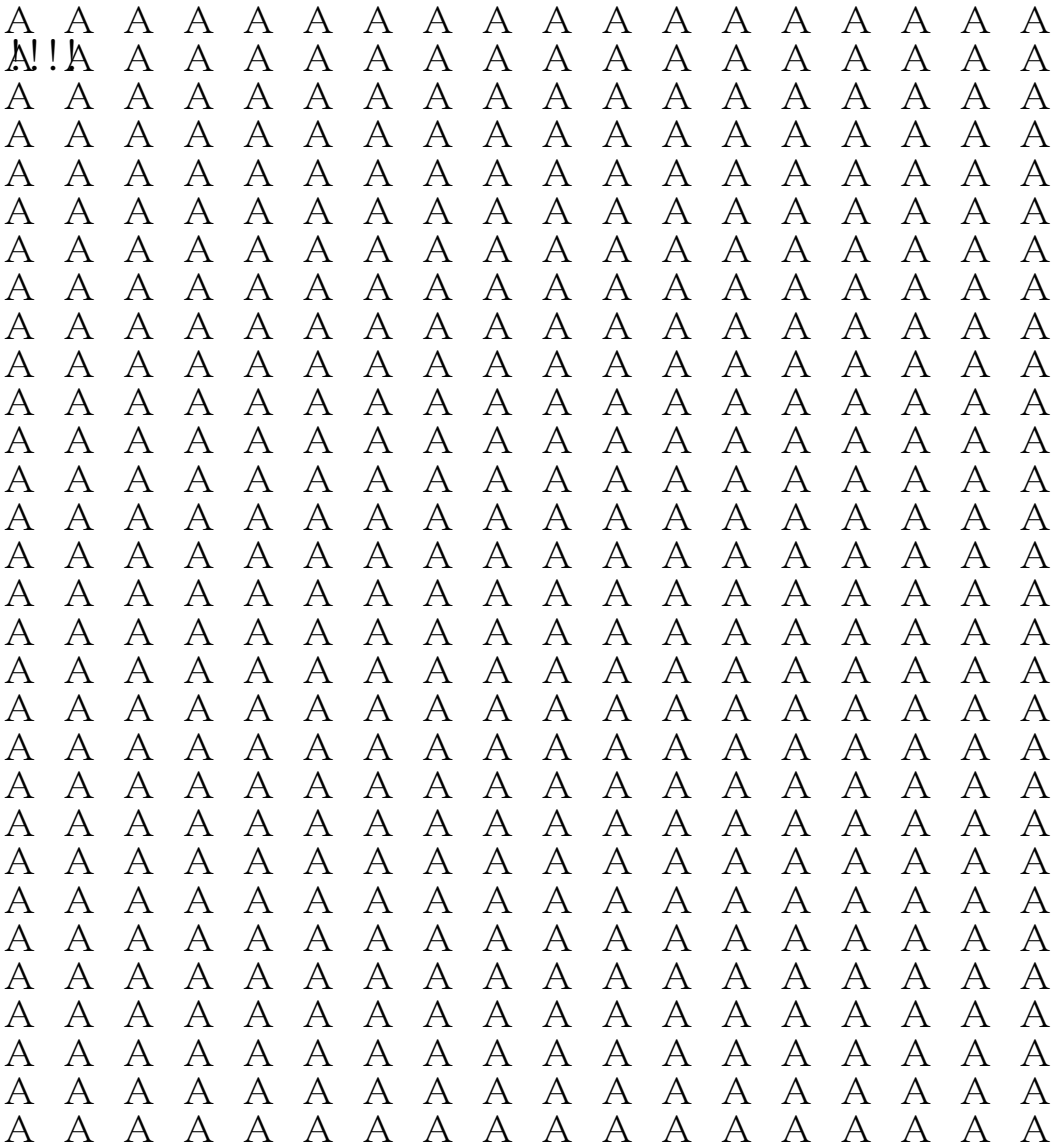
「?’’?!!????#?!?」

「凄い……二人が一??・瞬で、アレだけの使い魔を倒してるよ…… レナちゃん!!」

「正直言って、ドン引きの強さね……」

〔ラ?ン⇩ン⇒ラ?→→→……〕

ラァァァ


AAAA

〔ラァッ⇩?・・・・!!?〕

今すぐに迷わず始めよう、
ほんの小さな種（いっぽ）だけでいい、
未来に希望を持って、蒔（うご）いてみて。

「『宝具溶接（オーバーレイ）』」
エメラルドグリーンに輝く3本の剣を、いろはのクロスボウに溶けて混ざる。大きさは変わりもせず、只々神秘を纏った弓が生まれた。

それはまるで
――――”二人の意識”が更に混ざり合うように・・・

『カルンウェナン、セット』
「マギア、宝具、同時展開」

〔ラ???ン??ラン⇔・・・・♪〕
ズズズッ！

諦めず襲いかかる、縁を断ち切る階段。
対に二人（ひとり）が立ち向かう、未来（あす）への想いを乗せた剣（ゆみ）が絶望に狙いを定める。

『「日々の印を残す限り、輝く明日（さき）に向かう・・・・ さあ、照らして!!』」
【最果てに集（ラ・フィーネ・ディジョン）いし星々の願い】

眩い閃光が放たれ、絶交階段のウワサに直撃する。魔法少女だけの力では砕けぬよう”あとづけ”されたにも関わらず、難なくと貫き通した。

―――――――

Ｅｐｉｓｏｄｅ０９【Ｉ　ｈａｔｅ　ｅｖｅｒｙｔｈｉｎｇ・何もかもが憎い】？キャラ崩壊強め

［キ？⇔▪？!!］ググ!!
ズゥーン?!
ズゥゥゥゥゥゥゥンッッ!!
「……」
”黒いケープ”を被った少女は、おもちゃが散乱したような世界で結界の持ち主である魔女に”再び”武器を向ける。故意的ではないにしろ、あの魔女の攻撃手段であった折れたクレヨンは、使い魔を際限なく生み出して追い詰める…　筈だった。
生み出された使い魔であったモノは、何本もの短剣が突き刺さって絶命している。この魔法少女から何度逃げても、”獲物（プレ）を追う捕食者（ダーター）”のようにすぐさま先に待ち構えていた。隠れることは出来ない…　だから精一杯に巨大化し、相手が怖気付いて逃げることに望みをかけた。

「図体がデカくなればなるほど、”当てやすい的”になるだけ。魔女には、そんなことも考えられないんだね？」
黒い魔法少女は自身のクロスボウを取り外し、足元に置いて魔力を流す。するとクロスボウが巨大化し、バリスタのような形状へと変化する。
「まあ、どうせ言っても分からないかなー」
［#???$??!?］ガタガタ
「――”実体験”してみる？」
【デッドリー・ハート】

バシュンッ！

［・・・ッ!!?］

グシャッ!!

「心臓に狙ったんだけど、頭に当たっちゃったか。まだまだ改良しなきゃね」

コロコロ・・・・

放たれたバリスタ弾は、魔女に届くまで徐々に大きくなり、届く頃には魔女の頭部をまるごと貫いた。魔女が死亡すると、グリーフシードが魔法少女の足元へと転がる。主を亡くした結界は、主と共に消滅する。

そこは微かに届く夕日の光が、廃墟になったデパートを照らしていた。魔法少女はケープを外し、桃色の髪を風に任せて広げる。

「これで6個目・・・十分かな?」

”環　いろは”はそう言って場を離れる、自分を待ってるかも知れない人に向かって。

「ただいまー・・・・って、誰も返事してくれないなー」

私は階段を上がり、ある一室の前まで歩く。きっとあの人はまだ寝てるんだろうなって思うけど、いつの間にか目を覚ましてるんだと心の中でそう望んでいた。

ガチャッ！

「ただいま、拓未さん♪・・・・ヒドイじゃないですか、やちよさーん。居たなら居たって、返事してくださいよー」

「・・・・」フルフル

やちよさんは口に手を当てて、首を横に振る。

――そういえば、ここでは喋れないんでしたっけ？

「グリーフシード要ります？　私ならともかく・・・・　やちよさんって家にいる時間も少ないし、最近戦っていないなら必要だと思うんですけど・・・　まあ受け取ってください、私には必要のないモノですので♪」ケラケラ

「・・・・」

――――――

ごめんなさい・・・・ 私が止めるべきなのに、どうしても声が出ないの。あなたが目を覚ませば全部”夢”になるって、何も行動に移せなかった。

（（お願い・・・・ 早く目を覚まして））

―――――――

［やめて・・・・ もう私達から襲いません・・・・］
［お願い・・・・ 許して・・・・ 私達は、命令されただけで・・・・!!!］
鎖で縛られているのは、マギウスの翼に属している魔法少女達。許しを乞う者、現実を受け入れられない者、今もなお殺意を込めた目で睨む者、自分だけ助かろうと仲間を売る者。

――――まあ、選り取り見取りですね。

「うん、どうでもいいよ♪」
［・・・・ え？］
「だって、拓未さん達を見逃そうとしなかったでしょ？ そんな人たちの言葉なんて、信じる方がおかしいですよ。それに、自分だけ助かろうと思わないでください」
［まって・・・・ ねえ？ ウソよね・・・・ ねえ!!］

「・・・・ うん、もっと頑張らないとね♪」
最初は自分のしたことに、吐くくらい後悔したけど・・・・ 今となっては、マギウスの翼に償わせている時が〝役に立ってる〟と思うようになった。
きっと殺したくなるほど私を恨んでいるだろうけど、拓未さんを追い詰めたあなた達が悪いんですよ♪あの人の過去を知らないで、追い詰めたあなた達なんか・・・・ ね？
「早く出ておいで、マギウスの翼さーん。

♪　怖くないですよー!!」
スキップで廃ビルの中を探検する、魔女の気配が消えたばかりのこの場所で・・・・　その中で、真っ直ぐいろはに向かって近づく反応があった。

［・・・・］
「あれー？　黒羽根の衣装はどうしたのかなー？　私に近付くって意味・・・・　知ってるよね」
［全く見ぬと思ったら、ここまで墜ちおって・・・・　あの時に妾を助けたオマエは、そんな濁りきった目をしておらぬわ！］
近付いてきたのは、黒いゴスロリ服の少女。背中には黒い悪魔のような羽根が生えていて、紅い目は鋭く、肌は死体のように青白かった。
「・・・・　あなたみたいな綺麗な服を着た魔法少女、知らないよー？」クスクス
［それはそうじゃ、魔法少女ではないからな］
「何それ、拓未さんでもないのにー？」
［――――御託はここまでだ。その腐った根性、文字通り”叩き”直してやろう!!］
キィ！
キィー！
ゴスロリ少女の傘から溢れ出る、コウモリの群れ。いろは未だに気付いていないが・・・・　登校初日に助けた”コウモリ”が、今になって現れたのであった。

Ｅｐｉｓｏｄｅ１０【Ｂｅ　Ｔｈｅ　Ｏｎｅ・重なり合う魂の本質】

ねえ、聞いた？　　誰から聞いた？
　私は友達から聞いた。
ある服を着ていると、不幸な目に遭う噂！
　　それを体験した友達は・・・

――みーんな、ボロボロで血塗れになるの

それでみんな口を揃えて

「私じゃない」　　「知らなかった」
　　「助けて」
　　「来ないで」
「何もしてないのに」

ピンクと黒の魔法少女を見つけたら、

気を付けて・・・

・・・”絶対に逃げられない”から

【Ｉｔ’ｓ（今日）ｓｕｃｈ（はな）ａ（ん）ｂａｄ（て）ｄａｙ（厄日）ｔｏｄａｙ（だ！）】

――――――――――――――――――――――――――――――――

【一時環　紫百合いろは】

バキィッッ!!

「あーもう、動かないでよ。動くと”当たらない”でしょ?」

「戯け。　大層な”モノ”を持っておるのに、好き好んで当たろうとする者はおらん」

今まで見たこともない大剣を振り回すいろは、そして振り回される大剣を避けるゴスロリ少女だ。いろはが使っている大剣は、”斬った箇所(キズ)を治せない”…そんな呪い染みた能力、主な被害者たるマギウスの翼に限らず脅威に値する。

魔法少女の中にも”治癒”を得意とする者もおり、魔女相手に戦う魔法少女チームからすれば”普通の日常”に生きて帰る為の保険だ。

((傷が入った箇所を強力な呪いで纏わせ、外部からの干渉を弾く魔剣。原因たる呪いを解かない限り医療どころか、治癒魔法も役に立たない……　そもそも元の持ち主は))

「改めて見れば……　そんな武器(モノ)、お前の身の丈には合わんよな」

「……　アハッ♡」

いろはの目に、建物の隙間から僅かに照らされる。光に照らされても尚、どこまでも黒く濁った桃色の瞳。指摘された事により無表情へと変えた顔は、唐突に口が裂けんばかりの笑顔へと再び変える。

「

当然だよ!　これは”拓未さんの剣”だからっ!!

そんなことぐらい……

――”ユネス”さんだって分かってるでしょ!!

――――ユネス――――

拓未の一番最初の仲間であり、始祖吸血鬼をベースにした精霊の亜種となる”Ｒｅｔｕｒｎｅｒ（朽ちぬ者）”、その中でも特別な”Ｏｒｉｇｉｎａｌ（創られし者）”。本来知る筈のない彼女を、まるで”今まで見て来た”かのように真名看破する環いろは。

「・・・・故に解せんのだ。”八つ当たり”に使う馬鹿者に、力を貸す理由が見当たらん。妾（わたし）達の過去を見たのならば、尚更だとは思わんか？」

「思わないよ」

「・・・・即答か」

「だって・・・・”私達”が守るんだから!!」

【擬似憑依（ソウル・トレース）】

ジャラッ！

「ふむ」

トプンッ！

いろはが投影した鎖の数々がユネス襲いかかるも、届く前に”血の壁”が鎖を呑み込んで消滅する。

シュンッ！

「油断大敵だよっ！」

シュッ！

トプ・・

ボンッッ!!

「・・・・考えたな、投擲武器を爆破させるなど。エミヤを参考にでもしたか？」

「♪」ニコニコ

カッ！
「”ブラッド・スフィア”」
投影したダガーを血で受け止め、それに対して爆破。先程壁になった血は文字通り”血の雨”となった。次にユネスが戦法に関して指摘するが、いろはは気味が悪いくらいに笑顔を向けるだけ。次の瞬間、ユネスの足元に光が膨らむ。

――間一髪の所で、自身の周囲を赤い結界で防ぐ。

「残念、いけると思ったんだけどなー」
「・・・・このやり口」

「じゃあ、”次”行くね？」
【彩色憑魂（ソウル・カラーズ）：黄色の弾丸】
ズズズッ・・・
パシッ！
「”見滝原ベテラン魔法少女”の力、宛にさせてもらいますよ・・・!!」
ダッ！

いろはの服装が侵食するように変わり、ブラウス、茶色のミニスカート、ベレー帽やコルセットへと変化している。またソウルジェムの色はそのままで、変身先と同じように髪飾りとなっている。
変身を終えたいろはは、リボンを生み出しては”マスケット銃”へと変化させて手に取って走り出す。
「拓未の”――変身（シフト・チェンジ）――”」

――いや、これは・・・・」

「やっ！　とっ！　はっ！」
バンッ！　バンッ！　Ｂａｎｇ!!

「コフィン！」

ヒュー・・・・ガンッ!!

カカカンッ!!

「まだまだだよーー♪」

バンッ！　バンッ！　Ｂａｎｇ!!バンッ！　バンッ！　Ｂａｎｇ!!

召喚された紅い棺に、いろはの放つ弾丸を遮る。それでもマスケットを撃っては捨て、繰り返し撃ち続ける。これに動けないユネスは、ただ棺の後ろから離れはしない。

シュルッ・・・・

「レガーレ（捕まえて）」

ガシィッ！

「ぬぅ・・・　っ!!?」

「そのままこっちに」

ズズズ

瓦礫の隙間から黄色いリボンが蛇のようにユネスを棺ごと絡みつき、無抵抗な彼女を自身の前に来るようリボンで運ぶ。

「それで・・・　なんだったかな？ユネスさんが”私達”を叱りに来てー」

「・・・・・・」

「私に捕まっちゃった！　拓未さんの記憶と違って、呆気なさ過ぎだよ～!!」アハハ！

「――――まるで”愚者”だな。

ここまで狂い切れば、自分すらも分かりやしない。今のお前では、

寝ている拓未を任せるなぞ夢のまた夢よ」
「・・・ 黙ってよ」

ガンッ！
ガンッッ！

ガンッッッッ!!

巻き付いたリボンで、ユネスの上に棺が乗るよう地に何度も叩き付ける。人間なら”即死”だ、魔法少女なら”再起不能”。
リターナーは・・・・”軽傷”で済む

それを身を持って知っている、私達だからこそ躊躇なく行う。拓未さんの願いから生まれたリターナーは、元々から生存に特化している。自分の義姉と喧嘩するのは今更で、あの時はよく拓未さんに止められたんだっけな・・・

――――何を呆けている

「まだ口答えする元気があるんだね、ユネス」

ガバッ!!

「それはケホッ！・・・・ そうじゃろ。お前の自分勝手さには、毎度手が焼ける。幾度も尻拭いさせられる妾のことも、偶には労え」
「そんなの知らないよ、だって私達は・・・・ 私達は・・・・」
フラッ・・・ フラ・・・・
シュゥゥウ・・・・ !!
突然いろはは立ち眩み、変身していた姿にも変化が起きる。自身が纏っていた魔法少女の力は崩れ落ち、蒸発するように消えた。

「さっき知った妾が言うのもなんだが……　ようやく気付いたか、お前の”自己矛盾”を」

「私は……　私は……!!　なんで、いままで、私は、っ!!」

ワタシタチハ、”マチガッテナイ”。

「違う、違うよ、こんなの拓未、さんが、望んで……!!」

ユルサナイ…　ワタシタチヲヒキサイタヤツヲ!!

「聞いて、よ、！　拓、未さ、んの、??ならッ!!」

過呼吸したかのように、ふらつきながらも上手く話せないいろは。しかし……　その言葉を投げた先は、ユネスではない。

――ここには居ない”誰か”だ。

カランッ！

「えっ…（人の…”骨”?）」

壊してやる……

一片すら残さず壊してやるわ……!!

【――――――ソウル…――――――】

パキパキパキ！

「まって…　いやっ…!!」

「やめんか、”紫百合”ッッ!!」

［いたぞっ!!］

「なっ…　マギウスの翼だと!?」

いろはは紅い彼岸花に絡みつかれ、”誰かの骨”が自分を寄生するかのように纏い始める。そんな状況に、黒いローブを纏うマギウスの

翼達が大群を率いてやって来る。

［”環いろは”だ、殺せっ!!］

［やっと…　やっと…　同じ目に合わせられる!!］

［仲間の”仇”、楽に死ねると思うなッ!!］

［私に殺らせてよ!!　アイツのせいで…　!!］

［どいてよ、ボクが先なんだからっ!!］

ゾロゾロ…

怨念を発しながら、迫る黒羽根達。最早理性など無い、討死になろうとも、”死なば諸共”と狂気と殺意を増して襲いかかろうとする。それ程までに、いろははマギウスに属する魔法少女を敵に回したのだ。

「来るなっ!!　早死にしたいか、貴様らッ!!」

「来な…　い…　で」

壊して…　償わせてやる!!

「あっ…」

いろはの左半分の髪は黒に染まり、左目は桃色から紫色へと変色する。遂に表に出てしまったのだ。

――憎悪に満ちた彼岸花が。

「…　憑依変身（ソウル・コネクト）、”リリィ・ブラッド”」

【憑依変身（ソウル・コネクト）：　烈華（リリィ・パラドックス）／時壊】

カッッッッ!!

禍々しい黒い閃光と共に、いろはから発する衝撃波がユネスを除いて何もかも吹き飛ばす。
廃墟のビル？
ああ、消えたとも。ユネスの血で護られたマギウスの翼はともかく、人間の手で作られた物では存在が”朽ちて”しまう。
それをやって、やっと存在が”確立（へんしん）”する。紅いドレスに、心臓を掴んでいるような骨の装飾、ノイズを発するローマ数字が浮かぶ。

「紫百合よ、今から何をする気だ？」
『”鏖殺”、拓未を苦しめる者に”時間（いのち）”は必要無い。私達は、ただ償わせるだけよ！　これは決定事項だ、姉様に邪魔なんかさせません』

一度の会話に、口調が激しく変化する”いろは”だった者。いろはと紫百合が混じり合い、別の生命体へと”進化（へんしん）”した。しかし…　紫百合は、数々の人格が存在する。今のいろはは、砂漠の中に埋まる宝石と変わりはしない。

「お前がこのまま鏖殺したとしよう。拓未が護ったモノを壊して、悲しまないとでも言うか？」
「朽ちれば良い…　朽ちれば良い…　私達は決めた、たかが人間のちっぽけな時間（いのち）』

――ちっぽけなんかじゃないっ!!

「…　!?』

魔女の因子が強まり、愛した人以外を”害悪（てき）”と捉えて暴走した紫百合の意志。その中で”ちっぽけな存在”が、その意志を否定する。
「アナタには許せるの!?　この恩知らずの屑どもに、私達が愛する彼

を踏み躙る愚行をッッッ!!』

――そんなことしても、

誰かがまた悲しむだけだよ。

「知った事じゃない！　私達は・・・　!!』

――もうやめようよ、３９ちゃん。

「・・・　!?』

――誰も傷付けたくないよね、

・・・・　私もそうなんだよ？

「私達は・・・　私は・・・・・』

スゥ・・・・　ポロッ・・・・　ポロッ・・・・

赤いドレスは紫色に変色し、骨の装飾はポロポロと崩れ落ちる。さっきまで無かった黄緑色のカチューシャが投影され、”本来”の紫百合へと再統合される。

――もう・・・　見たくないの。誰かが傷付く姿なんて・・・

「うん・・・　帰ろう」

「全く、心臓が止まるかと思ったぞ。いや・・・・　元から止まっておったな、妾ヴァンパイアじゃし」

「すみません、手を貸してくれませんか・・・　？」

ユネスはいろはの言葉に、彼女の脚を見ると・・・　いつ倒れてもおかしくないくらいに、ガタガタと震えていたのだ。それに気付くと、

とっさにいろはに肩を貸す。

「手間のかかる妹が増えおったのぉ」

「あはは・・・・」

気絶したマギウスの翼達を残し、立ち去る二人。本来大きく取り上げかねない事件だが・・・・”不自然”にも、話題に上がることは無かった。

こうして新たなみかづき荘の住人が一人、加わる事となった。

――――残るリターナーは、”8”人・・・・

本編（Ｓｅａｓｏｎ２）
Ｅｐｉｓｏｄｅｌｌ【Ｉ ａｍ ｔｈｅ Ｓｕｐｅｒ ｇｉｒｌ ／ 私が”最強”の・・・!!】

――お姉ちゃん、今日も来てくれたんだね！

「お姉ちゃん・・・ これも拓未さんの記憶じゃないよね？」

ここしばらく見ていなかったけど、夢に会った少女であるのは間違いなかった。ただ・・・ 今まで拓未さんの記憶を見て来ただけに、つい拓未さんがどこかに居ると疑って周りを見回した。

――あーあ！ 早く元気になって、お姉ちゃんが言ってた人に会いたいなぁ♪

「”言ってた人”・・・？ それに、どこかで・・・」

ずっと入院しているこの子の言葉・・・
そしてどこかで・・・

――

「お姉ちゃん・・・ 息が・・・ っ・・・・」
「ゆっくり体をおこそうねっ！ ”●●”は強い子だから、大丈夫だよっ・・・ !!」

――

あの子の苦しい顔も、嬉しそうな顔も・・・・
あの子の・・・ 名前は・・・

懐かしくて愛しい…… あの響き……

「お姉ちゃん、私もしかしたら”退院できない”って…」
「諦めないで、”うい”!! お姉ちゃんがどうにかしてみせるから…!!」
「ううん、良いの」

”うい”…？
そうだ…”うい”だ!!

私の妹…
ずっと入院していて……
身体が弱くて…
すぐに消えてしまいそうな……
「かけがえのない…… 私の大事な妹… どうして私は…… 忘れて……」

『妹を助けたいのか…？』
「そんなの… 当たり前だよ…… 私のたった一人の妹なんだから…!!」
『そうか… 分かった』
シュッ!
ポタッ… ポタッ…
「何してるんですか… !?」
『俺の血は”認めた者に対してのみ万能薬”になる、気味が悪いだろ

うが・・・・ 妹に飲ませてやってくれ』
「これで・・・ ういの病気が治るんですね・・・ ?」
『ただし、認めていない者には逆の効果になる。間違っても、他の人間に飲ませるな』

――

「拓未さん・・・ !?」

どうして拓未さんが・・・
私は、拓未さんのことも忘れてたの・・・ ?

――

――邪魔だな、これ以上の配役は要らない
「誰なの・・・ !?」

――ただの”ゲームマスター”さ、分かるだろう?
まあ、同時に”プレイヤー”でもある。

白い・・・ 赤い瞳以外は、ただ白かった・・・

「し・・・ 知らない・・・」

――知らなくて結構、お前には消えてもらう
バッ!
「あっ・・・ !?」

――人のゲームデータを触るのは、”万死”に値する・・・
これは没収だ、たかがモブにチート行為は許されない。

「返してよ!! それが無いと、ういが・・・!!」
――ああ、アレか? あの施設ごと消しておいた
「えっ・・・・」

――そして次は、”オマエの番”だ

ボウッ!

――満足させられるのは、私だけ・・・ だった。こんな羨ましいモノを横取りなんて、妬けてしまうじゃないか?

さあ、その罪・・・ 償ってもらおう

「いやぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっっ!!!!!!!!」

ドンッ!
「どうしたの、環さん!?」
《なんじゃ、敵襲か!?》

「あれ・・・? やちよさん・・・・ ユネスさん・・・」
悲鳴をあげた私を心配して、勢いよくドアを開けた二人。釘で固定させた時計は落ちて、ユネスさんが《やってしもうた・・・》と、拾い上げる。

「どうしたの環さん・・・・ 凄い汗よ?」
「・・・・ びっしょりだ」

《悪い夢でも見たか？　そこのチビを枕にしたのが、間違いだったのかも知れんな・・・》
「チビ・・・？」
［キュ・・・・キュウウ・・・・］

枕の置いてあった方を見ると、いつもの枕とは違い、どう見ても小さなキュウべえ（瀕死）だった・・・・

「やっぱりコイツの仕業ね・・・　早めに処分すべきだわ」
ジャキッ！
《ええい、待てっ!!　拓未もそいつが必要だから、保護しようとしていたのだぞ!?　それでも処分するのか、んっ!?》
「・・・・・・チッ。生かすのも胸くそ悪いけど、拓未が起きるまで見逃してあげるわ」
《事情が分かってるだけに、気持ちは分からんでもないがのう・・・・》

やけにキュウべえのことになると、とっても機嫌が悪くなるやちよさん・・・　過去に何かあったのかな？
そう言えば、過去と言ったら・・・!!

「夢の女の子、誰だったのか思い出したんです!!」
「夢の・・・？　前に環さんが、ここに来た理由の・・・」
「はい。実は・・・私の妹”うい”だったんです!!」
「妹さんだったのね・・・　でも、どうして今まで忘れてたの・・・？」
私はぐったりしてるキュウべえを持ち上げて、やちよさんの目の前に見せつける。ちょっと乱暴に持ち上げたけど、キュウべえが頑丈なのは拓未さんの記憶を見て分かってるし。
「本当に間違いじゃないの・・・？　そいつが偽物の記憶を・・・」
《それは無いから、安心せい》
「・・・・・・」

「・・・・どうしてです？」
《拓未の世界で、ある程度の事情は知ってるからの。〝すまほゲーム〟やら、〝ゆ●ちゅうぶー〟で先のこともある程度はのう》
「・・・・・」チラッ
「・・・・」コクリ

私とやちよさんは、ユネスさんを捕まえた。やちよさんは前から、私は後ろから首を締めるように・・・・

「詳しく・・・・知ってることを全部吐いてください。今・・・私の冷静さを、欠こうとしています（片手でほっぺを引っ張りながら）」
ペチンッ！
「その胸の秘訣を教えなさい、そのロリ体型でそれは見過ごせないわ・・・・（無言の乳ビンタ）」

《ひゃ・・・ひゃめんか・・・ふぉの・・・!!》
【ブラッド？プール】
ザパァ！
二人がかりで強めに拘束していたのに、能力で液状化してユネスさんは難なくと抜け出す。

《抑止力のルールで、妾の口からでは未来をネタバレできんのじゃあ!!　それにやちよぉ!!　お前はもう成長期を終えておる、諦めてＰＡＤでもしておれ!!》
「前からやったわよ・・・!!　でもみふゆが、〝やっちゃん、そのままのやっちゃんで良いんですよ？〟って言われてからやってないのよ!?畜生めぇっ!!」
《ええい、付き合ってられん!!　いろは！》
「はい？」
《お前は〝水名区〟で、ウワサを探しておけ。ついでに、現地の助っ人を連れてな。妾は他のリターナーを探っておく!!》

【ヴァンプ?バット】

パタパタ、キー！　キー！

次の手がかりだけを残して、ユネスさんはコウモリになって飛び去りました。やちよさんは血涙を流してますけど、私はキュゥべえを連れて下の階へと行きます。

リビングの机の上には、スタンプラリーの紙が1枚置いてあり、デカデカと”ヒント!”という書き置きがありました。

「現地の助っ人・・・一体誰のことなんだろ?」ワカル?

［キュ～］ソダネー

「一人だけ当てがあるわよ、とびっきり”騒がしい魔法少女”が」

「もう立ち直れたんですか、やちよさん?　それで、その魔法少女って・・・・」

「本当はやりたくないけど、連絡を取っておくわ。今の内に、外出の準備しておいて。私は一時さんで動けないから・・・」

「はい、お願いします」

私はそう言って、寝ている拓未さんの部屋に行きます。部屋に入ると周囲の温度が下がるけど、丁度いいくらいの温度だ。

「拓未さん、やっと夢に出てくる女の子が誰なのか分かりました。それと・・・・」

思い返すのはういのことと、自称”ゲームマスター”の謎の女性。ハッキリ覚えてないけど、ただ・・・真っ白なのは覚えている。

それに・・・・心臓が締め付けるような感覚が・・・・

「目が覚めたら、いっぱいお話しましょう。だからそれまで、拓未さん

の仲間も探します。紫百合さんのことも、いつかは・・・・!!」

私はそう言い残して、水名区を目指して足を運んだ。駅のホームで待ち合わせ・・・・

どんな魔法少女だろ?”会えば嫌でも分かる”って、滅入った顔でやちよさんいってたけど・・・・・

「あーーーっ!!!!」

「ひゃっ!?」

「やっちよししょーが言ってた、いろはちゃんだよね！　私は”由比鶴乃（Ｙｕｉ　Ｔｕｒｕｎｏ）”、最強の魔法少女だよ!!」エッヘン！

「あ、ハイ」

助けて、拓未さん。やちよさんが私に面倒事を押し付けました、タスケテクダサイ・・・・・

Ｅｐｉｓｏｄｅ１２【Ｓｐｉｒｉｔｕａｌ　ｓｉｔｅｓ／縁結び】

「――それで、この紙を渡されまして・・・・」

［モキュモキュ］コレネ

私はこれまでの経緯を話して、今朝のユネスさんが置いていったスタンプラリーの紙を由比さんに見せます。ネットで詳しく見ようとしたんだけど、何故か検索に引っかからなくて・・・・

――――――――――――――――――――――――――――――――

※こちらのいろはちゃんは”機械音痴”・”方向音痴”・”流行の疎さ”を、ある程度克服出来ています。

――――――――――――――――――――――――――――――――

「もしかしたら、”口寄せ神社のウワサ”かも！」

「どういった内容なんですか？」

「それはね・・・・”会いたい人に会える”んだよ！」

――――――――――――――――――――――――――――――――

むかしむかし、大名がこの辺りを治めていた時代、町人の男が水名城に住むお姫様に身分違いの恋をしました。

２人は強い絆で結ばれていたけれど、それを知ったいいなづけによって、男は殺されてしまう。

お姫様は毎日毎日泣き暮らし、毎晩毎晩神社へ通い、神様にお祈りした。

『どうかあの人に会わせて下さい』‥‥ と。

１５００日の祈りの後、願いは叶うにあたりて、お姫様は死んだはずの男と再会した。

めでたしめでたし‥‥

―――――――――――――――――――――

「――――これが、水名区に古くから伝わってる伝説」

「それがこのスタンプラリーに‥‥」

「確証はできないけど、この辺のヒントとか内容似てるし‥‥ ここからは、一緒に調べて行けば良いと思うよ！」

「ありがとうございます、由比さん」

「‥‥‥」ムー

何故か、納得が行かないような顔をする由比さん。

ええ‥‥？

「由比‥‥ さん？」

「うーん‥‥ もう少し親しく」

「ああ、そういう‥‥ それでしたら、”鶴乃”さん」

「まだまだ‥‥」

「つ、”鶴りん”‥‥‥？」

［モキュ‥‥？］（・＿・；）

「おお!? ‥‥ でも、ちょっと違う」

「‥‥”鶴乃ちゃん”？」

「ごーかく！ よろしくね、いろはちゃん。一緒に”口寄せ神社”を見つけようね♪」

ギュッ！

「わっ!? ‥‥‥ はい！」

そこからは、鶴乃ちゃんとキュゥべえと一緒にスタンプ巡りをしました。途中から引っかけ問題もあって、一気に難易度が上がったけど。どうにか…

―――――――――――――――――――――

「無駄足でしたね…」
「うん、せっかくもう一枚の用紙も埋めてきたのにね…」

［もきゅ…］

時間は既に夕方になっていて、”ＭａｇｉＣｏｄｅ”にやちよさんが”コロッケのタイムセールがあるから買って来て”と、今は神浜デパートで買い物を終えた所でした。

ガサゴソッ
「はむっ… このコロッケ、結構イケるかも！」
「私も… うん、この味なら2日間連続でも大丈夫だね」
「モッモッモッ♪」サクサクサク
それにしても器用に食べるキュゥべえ、さながらハムスターのように食べる食べる。思っていた以上に安かったから、多めに買って良かった。

…… ほう

ゾワッ
「誰っ!?」クルッ！
「急にどうしたの、いろはちゃん？」
「えっと… 今誰か近くで…」
「それはそうだよ、いろはちゃん。今はタイムセールなんだから人も

多いし、タイムセール逃した人にジッと見られるなんてよくある話だよ～♪」
「そう・・・ かな・・・」
　まるで体の中を覗かれるような・・・ そんな感覚があったけど、気にし過ぎだよね。今日のスタンプラリーの疲れが、今でも引きずってるのかも・・・？

［モキューーーーーッッ!!］ポロッ
　ピョン！
「うわっ、コロッケ勿体ないよっ!?」
［キュゥゥゥゥゥゥゥッッ!!］
　ダダダッ!!
「待って、キュゥべえ!?」ダッ！
「いろはちゃんまで!? ちょっと、待ってよ～～!!」ダッ！

　食べかけのコロッケを置き去りにして、突然出入り口に向かって今までに見たことの無い速さで走り出すキュゥべえ。出口をそのまま通り抜け、先程降りたばかりの駅に戻っていた。

「キュゥべえ、そっちだとお家に帰れないよ!?」
［キュ～!! キューッ!!］
「”乗れ”って、言ってるの？」
［キュッ！］
「・・・ 分かった！」
　ピッ！
　私はＰｉｐｏＴａを改札口に当て、駅内に入る。最後の一本だけ、もう一度水名区に行ける電車がもうすぐ出ようとしていた。
　そこにキュゥべえが入り込み、このまま”普通に走って”いては間に合わない。
「((間に合えっ・・・ !!))」バッ！

ガシャンッ!!

私は電車に飛び込み、間一髪の所で間に合う。幸いにも他に乗客は居らず、キュゥべえが心配そうに近付いてきた。

「キュゥべえ、急にどうしたの？」

「キュッ！」

やってやったかのような顔をするだけで、答えは返ってこない。こうなってしまっては仕方ない、このまま水名駅まで乗ろう。

ガタン　ゴトンッ！　ガタン

「……」

私は目的地に着くまで、外の光景を眺めていた。電車なら、水名区までそう時間はかからない。そう眺めている内に、水名神社が建てられている山が見えて来た。

((あれっ…　参拝時間終わってるのに、なんであんなに明るいんだろう？))

――――――

更行っても」
《いえ・・・ 時間帯が関係してるかも知れないわ。民話では、”女は死んだ男と再会する”よね？》
「つまりは・・・ 死んだ男は幽霊だから、条件は”夜”になるんだね！」

突然走り出したいろは達に、やちよに連絡する鶴乃。残念ながらいろはのスマホは電池が切れており、今でも連絡を取る方法は無い。魔法少女が使うテレパシーも、範囲はそこまで広くない。

《鶴乃、今すぐに環さんを追いかけなさい》
「ど、どうしたの？ 私も追いかけるつもりだけど、そんなに焦るほどのこと・・・」
《ごめんなさい・・・ 実は、環さんはマギウスの翼に狙われているのよ。昼間は知り合いに見張りを頼んでいるけど》
「いろはちゃんが!? でも、どうしてそんな・・・」
《話すと長いわ・・・ 今は環さんと合流することだけを考えて、理由は後で話すから》

「・・・ うん、後でね」
まだ鶴乃は話に理由を納得していないが・・・ それでも、今日を共に過ごした友達だ。自分を動かす理由は、これだけでも良いと無理矢理に納得する。

【変身：魔法少女】
カッ！
「よぉーし、チョー特急で追いつくぞー!!」

「ねえ、水名神社で何かあるの・・・ ？」

［モキュキュ］

まるで”もうすぐ”と言わんばかりに、いろはを案内する小さなキュウべえ。

しかし――――異常性は、すぐに見つかる。

［・・・・］

［・・・・］

「どうしてマギウスの翼が、こんなに倒れてるの・・・!?」

キインッ！

（（誰か戦ってる・・・？））

鈍く響く金属音・・・その後に眩い閃光が何度も発した。レナちゃんの時に遭遇したウワサのように、特殊な条件で現れるタイプかも知れない。

それでウワサと戦っているのが”マギウスの翼”・・・？

「――――いや、多分違う」

この仮説に直感的な物が、”そうだ”と否定する。答えはいずれにしても、神社で待ち構えているだろう。

私はそれを確認しようと、更に登る速度を上げていく。

▪”これで最後”・・・という訳には行かないようだ▪

「あなたは・・・!?」

階段を登り切り、閉まっているはずの水名神社へと辿り着く。そこには”赤い外套を纏う褐色肌の男”と、”グニャリと曲がったトンガリ帽子を被った魔法少女”が、倒れているマギウスの翼達の中心で待ち構えていた。

?”あの子”なの??
▪ああ、油断はするな。どうやら既に、”仲間(リターナー)”を取り込まれたようだ▪
?そっか・・・ でも、一度倒せば引き剥がせれるよね??
▪確証は無いがね▪
【――――投影、開始(トレース・オン)】

ジジジッッ!

自分を見ては、何やら敵だと思い込まれている。それに・・・ あの赤い外套の人は、拓未さんの夢で見たことがあった。

「ま・・・ 待ってください、”エミヤ”さん!? 私達は敵ではありません!!」

《・・・ さて、どうかね? 敵ではないのなら、キミの中にいる彼女に証明して戴きたいものだ》
「紫百合さんは・・・」

――――それは出来ない

あの事件から、一度も現れることは無かった。ユネスさんも、”何度突付いても起きん、無理”と言ってた・・・

「待ってください!! ユネスさんなら・・・」
《”交渉決裂”だな》
「安心して、できるだけ苦しませないようにするから」

[モキュッ!?]
「ど、どうして・・・ !?」

もう魔法少女とも、
家族(なかま)とも戦いたくないのに・・・・

スゥ・・・

私からキュゥべえが急いで離れる・・・ エミヤさんの持つ剣から、自分の姿が映る。私の髪が黒く染まり、薄っすらと目も変色していた。
そう、それはまるで・・・・・・

《来るぞ、”かずみ!!”》
「分かってるよ!」

【憑依変身《シフト・ソウル》: 烈華/始刻《リリィ・プライマル》】

「この・・・・ わからず屋ぁぁっ!」

――私はまた、”暴走(へんしん)”した。

Ｅｐｉｓｏｄｅ１３【Ｂｉｒｄｓ　ｏｆ　ａ　Ｆｅａｔｈｅｒ　／　似た者同士】

「はぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ!!」
《フンッ！》
バキィッ!!
　ジジジッッ・・・
「そこっ!!」
　バシュンッ！
「がぁっ!!」

　紫百合の力を限定的に纏ったいろは、対するはリターナーの”エミヤ”と魔法少女の”かずみ”が戦っている。いろはが振るう骨と彼岸花の片手直剣に、エミヤが愛用する干将・莫耶を投影される度に叩き割っていた。並み魔法少女が身体強化しても、サーヴァントとしての能力を引き継いだエミヤは負けることは無いだろう。
　それでも紫百合の基本ステータスの大半は、エミヤを上回っており、かずみと互いに援護射撃することで補っていた。最も厄介な能力を十全に振るう紫百合ならともかく、自身を必死に抑えようとしているいろはなら負ける要素は無い。

「((抑えなきゃ・・・　抑えなきゃ・・・))はぁ・・・！　はぁ・・・!!」
《同化は出来ても、力までは操れないか・・・　このままでは、君がリターナーに意識を塗りつぶされるだろう。解除することオススメするよ》
「そんなの・・・　知らない・・・!!」

出来るのなら、既にやってる。でも、エミヤさんが言ってた通り”意識が遠のく”感覚はあった。どれだけ光を追いかけても、背後から真っ暗な世界が直ぐそばまで迫って来る。

《それは不可解だな、ここ最近聞く”マギウス狩り”も君の仕業だろう？　相手の固有魔法までも使いこなし、その力でマギウスに関わる者を無惨な姿に変えた”黒い悪魔”…　偶然にも紫百合は、”魔法少女の固有魔法を奪い、自身の力に加える”その側面を持つのだがね》

「待って！　アレは…」

バシュンッ！

「言い訳でもするの？　それとも…”自分のせいじゃない”って、開き直るの？」

「違う…そんなつもりじゃ…」

アレが起きたのは紫百合さんの暴走だと、ユネスさんから聞いていた。でも、同時に私の”私怨”があったんじゃないかって…

《取り敢えずは、”マギウスの仲間ではない”ことは理解した》

「それなら…!!」

《――とはいえ、身内を好き勝手に使っていたのは弁明の余地もない。”君が大人しく紫百合を返して貰う”か、”くだらない意地を張って自己消滅”するかの二択だ》

「私…　解除する方法なんて…　知らない」

《フンッ、話にならん》

ジャキッ！

怒りを抑えながらも、二刀を構える彼からは嫌でも殺気を感じ取れた。こうなってしまった以上、もう誰も止められない…

《仕留めるぞ、かずみ。こんなつまらない戦いに、時間を割くのは我慢ならん》

「分かった。でも…”殺さない”ようにね」

《善処できれば良いのだがね》
クラッ
「あっ・・・・」
さっきよりも強い目眩に、足がふらついた。もう今の自分には、戦う気力なんて残っていない。あるのは・・・・
――ちゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっっっ!!!
《ちぃっ・・ 新手か・・・ 避けろ、かずみ!!》
「うん!」
ボォウッッ!!
「いろはちゃん、大丈夫?」
「つる・・ の・・・ ちゃん・・・ ?」
「色々聞きたいことあるけど、まずは目の前の二人を倒すまで待って て!」
《こっちは仲間を取り返しに来ただけだ、人を悪者扱いするのは納得がいかないのだがね?》
「知らないよ・・・・ 私はいろはちゃんを助けるって、やちよに約束したんだからっ!!」
《いいだろう、私が君の相手をしよう。そっちは頼んだ》
「いろはちゃん・・・・ だっけ? 覚悟は・・・・ もう出来てるよね」
「何言ってるの、どっちも私が・・・・ !!」
ドガッ!
突如鶴乃は腹部に激痛が走り、背後の鳥居へとくい込むように吹き飛ばされてしまう。一瞬の速さに、彼女は対応できなかった。
鶴乃が自分の元居た場所を見やると、いつの間にか移動した男が足を突き出していた事から、その者に蹴り飛ばされたことをようやく認知する。

《この体たらくで、二人を相手できると？　そんな慢心を持つようなら、そのまま慢心に溺れて溺死しろ》
「鶴乃ちゃん・・・!!」
「いっ・・・!!　こんなの・・・　平気だよ・・・　いろはちゃんの方が、痛そうだもん・・・・」
「私・・・　ケガなんて・・・・」
　確かに私も戦っていたけど、傷は大したものじゃない。むしろこの短時間で誰が見ても私より傷を負っている、
　鶴乃ちゃんの方が心配だよ・・・・
「怪我なんかじゃない・・・・”心”が痛がってるもん」
「ここ・・・　ろ・・・」
「だから、私が戦うんだ。戦えない、いろはちゃんの分も・・・・!!」ダッ！
《正面から？　冗談もよしてくれ、それでは”狙ってくれ”と言ってるようなものだ》
【赤原猟犬（フルンディング）】
　エミヤが新たに赤い剣を投影し、そこから矢のように鋭く、細くして弓にセットする。真正面から迫る鶴乃に向けて放たれる。
　シュッ！
「うっ・・・　掠ったくらいなら！」
《匂いは覚えたな？　”行け”》
　グイッ！
　ビュンッ！
「あぅ”ッッ!?」
「鶴乃ちゃん!?　何で矢が・・・」
「”赤原猟犬（フルンディング）”・・・　北欧の英雄”ベオウルフ”が使っていた魔剣。血の匂いを嗅ぎつけ、ただ振り回すだけで最適格な斬撃を打ち込めるのを”矢”にしたんだってさ。

あの剣に血を吸わせちゃうと匂いを覚えて、弾かれてもまた追ってくるよ」
「そんな・・・!?」
どれだけ離れて隠れようが、Ａｌｌ　ｒａｎｇｅ　ａｔｔａｃｋ（破壊しない限り追い続ける矢）だ。それも一本だけでも厄介極まりないのに、それを”複製できる”のにも関わらず一本で済ませている・・・

「いいの、あの子を助けなくて？　あのままだと、魔法少女として戦えなくなるよ」
（いいわけない!!　お願いします紫百合さん、今だけは・・・）
グッ・・・・

再び自分の魂に火を灯し、僅かながらも意識を取り戻すいろは。しかし・・・　いくら足掻こうと、動く気配のない自身の体に苛立った。

「どうして!?　動いてよ!!　私はどうなってもいい、鶴乃ちゃんだけでも・・・　!!」
「・・・・　それじゃあ、紫百合を動かせないよ」
「知ってるの・・・・　？」

ただ首を縦に振り、少女は再び語る。

「紫百合には2つの側面があるの、”魔女の側面”と”魔法少女としての側面”が・・・・　今のいろはちゃんは、まだ”魔女の側面”。紫百合の本能に主導権があって、あなたはその”器”」
「どうすれば・・・　良いの・・・」
「少しだけでもいい、”紫百合を理解して”」
「理解・・・・　する・・・・」
クラッ・・・
目の前が真っ暗になる、Ｔｉｍｅ（時間）　Ｏｖｅｒ（切れ）だ。いくら魂に火を灯

そうが、現実はそれさえも呑み込む。
暗闇に落ちる。
落ちる
オチル…
オチル……

私の魂は、底のない闇へ落ちていった。それは、どうしようもない事実に思えた。拓未さん風に言えば、”ここでＧＡＭＥ（打ち）ＯＶＥＲ（止め）”なんだって。

「わたしは…　まだ……」

凄まじい後悔の念が溢れ、自分の顔を塞いで涙する。それも無意味だ、こうなったら誰も助けることも、助けられることもないのだから。

〈嘘よね…　こんなの悪い悪夢よ…〉
〈他の姉妹は食べてもいい!!　だから私は…　!!〉
〈いやぁぁぁぁぁぁ!!　死にたくないっ!!　私はまだっ…〉
〈やだぁぁぁぁぁぁぁぁっっ、助けてぇぇぇぇぇぇっっっ!!〉

「お姉ちゃん…？」
数々の断末魔に、いろはは誰の声なのかを言い当てた。決して存在しない筈の記憶、そして……

『――珍しいのが来たわね』
拓未さんの記憶で見た”ほむらさん”が、ベンチに座っていた。どうしてこの人を見ると、ういのような愛おしい気持ちに……

『ここは”３９”の記憶、今のアナタが抱く感情も彼女から来るものよ』
「３９ちゃんの……」

『３９はこの時の記憶を今でも後悔し、同時に運命を変える瞬間だった。ほら、あそこを見なさい』

私は彼女の指差す方向を見ると、誰かが小さいダクトに入っていった。もしかして・・・・

『そうよ。今まで見てきたのは、一時　拓未の記憶じゃない。３９と・・・・　私達、”Ｄｅｆｅｃｔｅｒｓ（欠陥少女）”の記憶よ』

「ディフェクターズ・・・？　それって・・・・・」

『貴方の想像通りよ』

そう、彼女達は”作られた命”だ。魔法や魔術なんかじゃない、純粋な科学で複製されたクローン人間。そう気付いたら、自分と同じ人間がそんなおぞましい事をしたことに、そして彼女たちに使い魔を襲わせた純粋悪の塊に吐き気を催す。

『残念だけど、ここでは吐くことも飲食さえもできないわよ。気を紛らすのに、トランプがあれば良いのにね・・・』

「だ、大丈夫です・・・!!　私は・・・・」

『無理をしないで、そういった人から壊れるのよ』

「・・・・・」

『これで、私達のことを知ったわね。次は、３９を知りなさい』

「７さん・・・・　あなたはどうするんですか？」

『決まってる、他の妹達が癒えるまで見守るのよ』

そう告げると、周りは再び断末魔が溢れ返る。手作りの家には彼女達の返り血と、使い魔に燃やされた只々”赤い風景”が繰り返していた。

「こんなのを、今まで・・・!?」

『これでも減った方よ？　それに同情なら、妹達にしてあげて。私は同情される必要なんてないもの』

7が振り返って、私に再び顔を見せる。それは先程と違い、目の下にクマが出来ていた。彼女は裂けるように、引きつった笑顔で口を動かす。

『ここに居れば、拓未が私を慰めてくれる…　私を愛してくれる、そんな特権を手放したくないもの…　!!』

「7…　さん…　あなたは…　!?」

『”魔女(ウィッチ)”みたいでしょ？私だって彼に会う前から、とうに壊れているわ。　今の貴方では、とてもとても理解出来ないでしょうね!!』

アハハハハハハハ!!

7は気が狂ったように笑い、自分から血に染まった池に飛び込む。おぞましくも、”美しく(うらやま)”感じる自分の感性に疑った。このまま居ればきっと、自分も同じような末路を辿るのに…

「そっか…　私も…」

『まだダメよ』

「え？」

『まだアナタは来てはダメ、まだ引き返せるのよ？』

瞬間、また落ちていく感覚に陥る。足場があったはずなのに、暗い海の底に沈むように、そして自分を上から覗き込む魔女が見守っていた。

『ア…　タは…』

――――もう何も聞こえない

どれだけの時間が…　いや、一瞬なのかもしれない。もう日の光さえも思い出せない中で、自分は何かに生まれ変わったようだった。

「‥‥‥ わたしは」

心を眠らせてしまいたい。
自分の使命なんて忘れてしまいたい。
永遠にこのままだと思う不安から、目を背けて壊れてしまえば良い。

‥‥‥ けど

((なんだろう‥‥‥ なにか‥‥‥))

気のせいかもしれない、
希望に諦めず、心が惑わす幻覚かもしれない。

――――――――――――!

((この‥‥‥ こえ‥‥‥))

その声は、遥か遠くから‥‥‥
流星のように魂(いのち)を燃やしながら、それでも輝きながら加速する。

――――――――――――俺(わたし)を見ろ。
――――――――――――手を伸ばせ。
――――――――――――ただ一言、■■を呼べと。

「‥‥‥ え‥」

もう長く動かなくなっていた身体に、熱を入れるように叩き起こす。
まだ声が出ないし、手があるのかさえ疑わしい。
やっぱり”幻聴”だと、心を閉ざしたくなる。

（（なのに・・・））

――――諦めるなっ!!

光輝くその身を削ってまで、暗闇を切り裂く流星が私を追いかける・・・・ 微かに見えたのは、龍の”瞳”が力強く私を見つめていた。

――――あと一歩、あと一手が足りない・・・ !!

――――――――最善は尽くした、後は・・・・

輝く龍星（りゅうせい）から、自分の知るあの姿で現れた。

それはまるで・・・・

『Ｔｈｅ（後） ｒｅｓｔ（は） ｉｓ（任） ｌｅｆｔ（せ） ｔｏ ｙｏｕ（た）、いろは!! 手が動かないのなら、舌でも伸ばしてくれ！』

（（あぁ・・・ !!））

彼の声を聞くと、今まで空洞だった心の穴が満たされていく・・・・

自然と忘れていた涙も、頬を伝って光（そら）へと溢れる落ちる。

『いろは、忘れたのかい？ 帰ったら、一緒にパフェを食べようって!!

そんな約束をしたのに忘れた、キミのＰａｒｔｎｅｒ（相棒）の名前は誰だ!?』

その光を知っている。

その声だって知っている。

私は手を伸ばし、ゆっくりと口を動かした。

《「・・・・ 助けて・・・ 拓未・・・ さん・・・ ッ!!」》

『あぁ・・・・ ヒーローはいつだって助けに来る!!』

誰かの声が重なり合う、きっとその声の持ち主も同じ状況だろう。伸ばした手は、別の熱に掴まる。

カッ！

「拓未さん・・・ !!」

『久しぶりだね、紫百合、いろはちゃん』

《全くよ、このバカっ!!》

私は拓未さんがもう片方の手で掴む、その方へと見る。そこには7さんに似ているが・・・・ どことなく幼く、そして拓未さんのように魂が輝いていた。

「39・・・ さん・・・ ?」

《紫百合で良いわよ、いろは》

『こんな時に言うのもなんだけど・・・・ 私はまだ帰れそうにないんだよね～』

「《はぁ？》」

『仕方ないでしょ!? チートとはいえ、ちょっとの間しか居られないんだよ!! 助けに来ただけでも、及第点くらいは良いんじゃないの!!?』

私は紫百合さんと互いに視線を合わせ、口を揃えて言う。

「《ダメ！ 帰って来るまで、点数なんかあげないから!!》」

『・・・・ そっか、待っててね”二人”とも』

「‥ ま‥‥ だ‥‥‥」
《そろそろ諦めたまえ。この状況がどれだけ絶望的なのか、分からぬほど馬鹿ではあるまい》
「‥‥ ま‥ もる‥ ん‥ だ‥ みん‥‥ な‥ を‥‥‥」
《――そうか、もう》
若かりし自分を見るように、少女を見つめた。自分を掴んでいた手をゆっくり解くと、鶴乃は力が尽きたかのように眠りにつく。エミヤは先程とは打って変わって、鶴乃に負担がかからないよう優しく抱き上げる。

《悪役を買って出ても‥‥ 骨折り損のくたびれ儲け、か》
「ううん、違うよ」
《これは‥‥ !》

「スゥ‥‥‥ ぅ‥‥‥」

鶴乃のように眠りについているいろはの手には、一輪に彼岸花を持った少女が描かれた銀色のカードが握られていた‥‥‥